

北陸自動車道関係遺跡調査報告書

第 16 集

原目山墳丘墓群

重立山古墳群

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

北陸自動車道関係遺跡調査報告書

第 16 集

原目山墳丘墓群

重立山古墳群

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



1号墳一次埋葬施設出土 乳文鏡



1号墳出土 玉類 (一次埋葬施設出土: 1 扁平玉 3 勾玉 5~10 管玉 11 棗玉
二次埋葬施設出土: 2・4 勾玉)



重立山古墳 (重立から北陸自動車道路予定地をみる)

序

原目山墳丘墓群と重立山古墳群は、古墳の発生と云う考古学史上大きな意味を持った遺跡です。その遺跡が北陸自動車道建設に伴って路線と法面に一部がかかり、学会、地元研究者等を中心に強く保存の要望がありました。

福井県教育委員会は、日本道路公団と路線の変更等の度重なる協議を行い、その結果、現状での保存が困難と判断された八基を最終的に調査することとなりました。

調査は、帝塚山大学に委託して教授堅田直氏を中心に進められ、その成果が本報告です。

今後の埋蔵文化財保護に役立ち、学術研究に寄与することを望むものであります。

調査にあたりましてご協力いただきました帝塚山大学考古学研究室をはじめ、関係各位に
対し厚くお礼申し上げます。

平成二〇年一〇月

例 言

- 一、本書は、北陸自動車道建設に伴う原目山墳丘墓群・重立山古墳群の発掘調査報告書である。
- 二、発掘調査は、福井県教育委員会が帝塚山大学に委託して実施した。
- 三、発掘調査は、昭和四十七年七月一日から昭和四十八年四月三〇日まで、帝塚山大学教授、堅田 直氏を発掘担当者として、帝塚山考古学研究所が中心となって実施された。
- 四、本書は、昭和五一年度発行予定の報告書であつたが、報告書が刊行されないまま、担当者の堅田 直氏が平成一八年八月に逝去されるに至つた。
- 五、福井県教育委員会は、報告書の進捗状況を調査し、考察まで書かれた本文と、コロタイプ印刷された三百部の写真図版を確認した。なぜ先生が本文を印刷に付さなかつたかは今となっては不明である。
- 福井県教育委員会は、本文の内容を吟味し、事実記載がきちんと書かれていると判断して報告書として刊行することにした。
- 六、本書は、堅田氏が書かれた本文をほぼそのままに、必要に応じ福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにおいて加筆・修正を加え、実測図については再トレースをして編集した。
- 七、本書の作成にあつては、堅田由子様、岡本篤子様には資料の探索にご尽力いただいた。記して感謝申しあげる。
- 八、報告書に掲載された遺物は、鉄器・家型埴輪・玉類は福井県に保管されているが、他のものの所在は現時点では確認することができなかった。

次

原目山墳丘墓群・重立山古墳群

第一章 序 説

一	調査までの経緯	1
二	原目山墳丘墓群・重立山古墳群の位置・環境	5
三	原目山墳丘墓群の構成	7
四	重立山古墳群の構成	13
第二章 原目山三七号墳		
一	調査までの状況	15
二	調査の経過	15
三	外部構造	17
四	埋葬施設の構造	20
第三章 原目山三八号墳		
一	調査の経過	23
二	外部構造	25
三	内部構造	28
第四章 原目山三九号墳		
一	調査の経過	30
二	外部構造	32

堅田 直

第五章	重立山一号墳	
一	調査の経過	34
二	外部構造	39
三	内部構造	46
第六章	重立山二号墳	
一	調査の経過	57
二	外部構造	58
三	内部構造	61
第七章	重立山三号墳	
一	調査の経過	68
二	外部構造	69
三	内部構造	72
第八章	重立山四号墳	
一	調査の経過	75
二	外部構造	76
三	内部構造	79
第九章	重立山五号墳の存否の問題	
一	重立五号墳の存否の問題	81
二	その他の遺物	82
第十章	まとめ	82

挿 図 目 次

第1図	原目山墳丘墓群・重立山古墳群の位置と周辺の遺跡分布図	6
第2図	原目・重立山付近遺跡分布図	8
第3図	原目山墳丘墓群・重立山古墳群分布図	10
第4図	原目山墳丘墓群地形図	11
第5図	原目山墳丘墓37号墳墳丘遺構実測図	12
第6図	原目山墳丘墓37号墳出土土器	12
第7図	37号墳墳丘実測図	18
第8図	37号墳墳丘断面図	19
第9図	37号墳埋葬施設実測図	21
第10図	37号墳墓壙	22
第11図	38号墳墳丘実測図	26
第12図	38号墳墳丘断面図	27
第13図	38号墳墳丘積石状況図	29
第14図	39号墳墳丘実測図	32
第15図	39号墳墳丘断面図	33
第16図	1号墳墳丘実測図	40

第17図	1号墳墳丘断面図……………	41
第18図	1号墳葺石検出状況……………	42
第19図	1号墳埴輪出土状況図……………	43
第20図	1号墳出土家型埴輪……………	45
第21図	1号墳一次埋葬施設副葬品配置図……………	48
第22図	1号墳一次埋葬施設鏡・玉類出土状況……………	49
第23図	1号墳一次埋葬施設出土剣実測図……………	49
第24図	1号墳一次埋葬施設出土副葬品実測図……………	50
第25図	1号墳出土玉類X線写真……………	51
第26図	1号墳二次埋葬施設副葬品配置図……………	51
第27図	1号墳二次埋葬施設出土剣実測図……………	52
第28図	1号墳二次埋葬施設出土副葬品実測図……………	54
第29図	1号墳二次埋葬施設出土鉈実測図……………	56
第30図	1号墳二次埋葬施設出土玉類実測図……………	56
第31図	2号墳墳丘実測図……………	59
第32図	2号墳墳丘断面図……………	60
第33図	2号墳一次埋葬施設・二次埋葬施設副葬品配置図……………	62

第34図	2号墳一次埋葬施設出土剣実測図	63
第35図	2号墳一次埋葬施設出土矛実測図	64
第36図	2号墳二次埋葬施設墓壙石組	65
第37図	2号墳二次埋葬施設出土剣実測図	66
第38図	2号墳二次埋葬施設出土鉄器実測図	67
第39図	3号墳墳丘実測図	70
第40図	3号墳墳丘断面図	71
第41図	3号墳埋葬施設副葬品配置図	73
第42図	3号墳埋葬施設出土刀子実測図	74
第43図	4号墳墳丘実測図	77
第44図	4号墳墳丘断面図	78
第45図	4号墳埴輪出土状況図	79
第46図	4号墳埋葬施設実測図	80
第1表	原目山墳丘墓群および重立山古墳群一覧	9

目 次

図 版 目 次

巻首図版

重立山古墳群（カラー）

上 1号墳 一次埋葬施設出土乳文鏡

下 1号墳出土玉類

重立山古墳（重立から北陸自動車道路予定地をみる）

図版 第一

原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号・38号・39号墳 空中写真（西から）

2 原目山墳丘墓群（重立4号墳よりみる）

図版 第二

原目山墳丘墓群 遺跡

1 36号墳（左） 37号墳（中央） 38号墳（右） 空中写真（南から）

2 37号墳 発掘調査前（西から）

図版 第三

原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号墳 発掘調査前（38号墳よりみる）

2 37号墳 発掘調査前 墳丘上面、36号墳（東から）

図版 第四

原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号墳（手前）の表土除去後状況（西から）

2 37号墳 墳丘上面表土除去後（北から）

図版 第五

原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号墳 3区断面（東南から）

2 37号墳 3区断面（東から）

図版 第六

原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号墳 盛土 土壙（南東から）

図版 第七 2 37号墳 断面と土壇をみる（東から）
原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号墳 盛土下の状況（東から）
2 37号墳 盛土下の状況（北から）
図版 第八 原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号墳 周溝南側と表土断面（東南から）
2 37号墳 周溝南側（東南から）
図版 第九 原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号墳 周溝南側と表土断面（南西から）
2 37号墳 周溝南側（南西から）
図版 第一〇 原目山墳丘墓群 遺跡

1 37号墳 周溝北側（東北から）
2 37号墳 周溝東側（南から）
図版 第一一 原目山墳丘墓群 遺跡・遺物

1 37号墳 周溝 東側（南東から）
2 37号墳 出土土器
図版 第一二 原目山墳丘墓群 遺跡

1 38号墳 空中写真（南から）
2 38号墳 発掘調査前（東から）
図版 第一三 原目山墳丘墓群 遺跡

38・39号墳 表土を削って礫面を出した状況（西南から）
図版 第一四 原目山墳丘墓群 遺跡

図版 第一五 原目山墳丘墓群 遺跡
1 38号墳 中央部断面壁を残して掘り下げた状況（西南から）
2 38号墳 表土を削って礫面を出した側面の状況（南西から）

図版 第一六 原目山墳丘墓群 遺跡
1 38号墳 中央部礫石面を残し土砂を除去（西南から）
2 38号墳 礫石面の状況と中央主体土壇の状況（北東から）

図版 第一七 原目山墳丘墓群 遺跡
1 38号墳 周溝西側（南西から）
2 38号墳 墳丘礫石の状況（西から）

図版 第一八 原目山墳丘墓群 遺跡
1 38号墳 周溝南側（北西から）
2 38号墳 周溝北側（北東から）

図版 第一九 原目山墳丘墓群 遺跡
1 38号墳 周溝東側表土と溝底（北から）
2 38号墳 周溝東側溝底（北から）

図版 第二〇 原目山墳丘墓群 遺物
1 38号墳 周溝東側表土と溝底（南から）
2 38号墳 周溝東側（南から）

図版 第二一 原目山墳丘墓群 遺物
38号墳2区 出土土器
38号墳4区 出土土器

図版 第二二 原目山墳丘墓群 遺跡

- 1 39号墳を38号墳上よりみる(西から)
- 2 39号墳 墳丘断面(西から)

図版 第二三 原目山墳丘墓群 遺跡

- 1 39号墳 3区墳丘断面(北東から)
- 2 39号墳 東端(南東から)

図版 第二四 重立山古墳群 遺跡

- 1 重立山古墳群遠景
- 2 重立山古墳群遠景

図版 第二五 重立山古墳群 遺跡

- 1 重立山古墳群を原目山よりみる(調査前)
- 2 重立山古墳群を原目山よりみる(調査中)

図版 第二六 重立山古墳群 遺跡

- 1 重立山古墳群周辺伐採後全景 調査開始時(東から)
- 1 重立山古墳群全景 調査中 左から1号・2号・3号・4号墳(東から)

図版 第二七 重立山古墳群 遺跡

- 1 1号墳遠景 調査前(東から)
- 2 1号墳全景 調査前(2号墳から)

図版 第二八 重立山古墳群 遺跡

- 1 1号墳 墳丘の調査(2号墳から)
- 2 1号墳 中央部断面壁を除去(2号墳から)

図版 第二九 重立山古墳群 遺跡

- 1 1号墳 西南斜面葺石(西北から)

図版 第三〇 重立山古墳群 遺跡 2 1号墳 西北斜面葺石（西南から）

図版 第三一 重立山古墳群 遺跡 1 1号墳 西南斜面葺石基底部（西北から）
2 1号墳 西斜面葺石基底部（西から）

図版 第三二 重立山古墳群 遺跡 1 1号墳 西斜面葺石（墳頂から）
2 1号墳 西斜面葺石（墳頂から）

図版 第三三 重立山古墳群 遺跡 1 1号墳 墳丘上円筒埴輪（東から）
2 1号墳 円筒埴輪出土状況
3 1号墳 円筒埴輪出土状況

図版 第三四 重立山古墳群 遺跡 1 1号墳 葺石と埴輪片
2 1号墳 円筒埴輪出土状況

図版 第三五 重立山古墳群 遺跡 1 1号墳 家型埴輪出土状況
2 1号墳 家型埴輪出土状況

図版 第三六 重立山古墳群 遺跡 1 1号墳 墳丘中央部南側（東から）
2 1号墳 封土内集石遺構

1 1号墳 主体部と埋土（東から）

図版 第三七 重立山古墳群 遺跡 2 1号墳 墳頂主体部全景（2号墳から）

- 1 1号墳 主体部（西から）
- 2 1号墳 主体部（東から）

図版 第三八 重立山古墳群 遺跡

- 1 1号墳 主体部と副葬品出土状況（北から）
- 2 1号墳 主体部と副葬品取上げ後（北から）

図版 第三九 重立山古墳群 遺跡

- 1 1号墳 主体部と副葬品出土状況（東から）
- 2 1号墳 主体部と副葬品取上げ後（東から）

図版 第四〇 重立山古墳群 遺跡

- 1 1号墳 主体部と鉄剣出土状況（東から）
- 2 1号墳 主体部と鏡・玉類出土状況（東から）

図版 第四一 重立山古墳群 遺跡

- 1 1号墳 追葬部と副葬品出土状況
- 2 1号墳 追葬部と勾玉、鉄矛出土状況

図版 第四二 重立山古墳群 遺跡

- 1 1号墳 追葬部副葬品出土状況（南から）
- 2 1号墳 追葬部副葬品出土状況（東から）

図版 第四三 重立山古墳群 遺物

- 1号墳 出土鉄製品・砥石

図版 第四四 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第四五 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第四六 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第四七 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第四八 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第四九 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土埴輪
図版 第五〇 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土埴輪
図版 第五一 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土埴輪
図版 第五二 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土埴輪
図版 第五三 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土埴輪
図版 第五四 重立山古墳群 遺物

1号墳 出土埴輪・土器
図版 第五五 重立山古墳群 遺跡

図版 第五六 重立山古墳群 遺跡

- 1 2号墳全景 調査前（東から）
- 2 2号墳（手前）全景 調査中（東から）

図版 第五七 重立山古墳群 遺跡

- 1 2号墳 1区北面盛土断面（南東から）
- 2 2号墳 4区西面盛土断面（北東から）

図版 第五八 重立山古墳群 遺跡

- 1 2号墳 主体部副葬品出土状況
- 2 2号墳 主体部鉄剣出土状況（東から）
- 3 2号墳 主体部と鉄矛・鉄斧出土状況（西から）

図版 第五九 重立山古墳群 遺跡

- 1 2号墳 追葬部と副葬品出土状況（南から）
- 2 2号墳 棺外鉄鏃出土状況（南から）

図版 第六〇 重立山古墳群 遺跡

- 1 2号墳 1区西面盛土断面と石材（南から）
- 2 2号墳 追葬部土壇（南から）

図版 第六一 重立山古墳群 遺跡

- 1 2号墳 追葬部と副葬品出土状況（南から）
- 2 2号墳 追葬部と副葬品出土状況（北東から）

図版 第六二 重立山古墳群 遺跡

1 2号墳 追葬部1号鉄剣出土状況（東から）
2 2号墳 追葬部2号鉄剣出土状況（東から）
図版 第六三 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土鉄製品
図版 第六四 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第六五 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第六六 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第六七 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第六八 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第六九 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第七〇 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土鉄製品・X線写真
図版 第七一 重立山古墳群 遺物

2号墳 出土埴輪
図版 第七二 重立山古墳群 遺跡

1 3号墳全景 調査前（南から）

図版 第七三 重立山古墳群 遺跡
2 3号墳全景 調査中（西から）

1 3号墳全景（東南から）
2 重立山3号墳

図版 第七四 重立山古墳群 遺跡

1 3号墳 4区西壁断面（東から）

2 3号墳 墓壙内西壁（東から）

図版 第七五 重立山古墳群 遺物

3号墳 出土埴輪

図版 第七六 重立山古墳群 遺物

3号墳 出土鉄製品・土器

図版 第七七 重立山古墳群 遺跡

1 4号墳全景（南から）

2 4号墳 断面壁を除去（南から）

図版 第七八 重立山古墳群 遺跡

1 4号墳全景（東から）

2 4号墳全景と埴輪出土状況（東南から）

図版 第七九 重立山古墳群 遺跡

1 4号墳 埴輪出土状況

2 4号墳 東側溝（北から）

図版 第八〇 重立山古墳群 遺跡

1 4号墳 土壙上面（東北から）

図版 第八一 2 4号墳 土壙上面（西から）
重立山古墳群 遺跡

1 4号墳 主体部（東から）

2 4号墳の尾根上5号墳？とよばれた地点（西から）

図版 第八二 重立山古墳群 遺物

4号墳 出土埴輪

図版 第八三 重立山古墳群 遺物

4号墳 出土埴輪

図版 第八四 重立山古墳群 遺物

4号墳 出土埴輪

図版 第八五 重立山古墳群 遺物

4号墳 出土土器

第一章 序 説

一 調査までの経緯

昭和四七年五月頃に突然福井県教育庁文化課長谷口睦男氏の訪問を受けた。その内容は、「北陸自動車道が道路公団によって建設される。それによって福井県下の遺跡も何箇所かは破壊される。私たちは文化財保護の立場から出来る限り道路が遺跡地を通過しない地点を選定する努力をしたが、最終的な路線案は、一部の遺跡を破壊する。とりわけ、かの有名な原目山墳丘墓群を含んでいる。どうか発掘調査して欲しい」という要望を述べられた。

原目山遺跡というのは、明治大学考古学研究室の大塚初重教授らによって発掘され、弥生時代の墓制を考える上には欠かせない非常に重要な遺跡で、考古学会で注目されているところである。私は、明治大学考古学研究室が調査されたところでもあるし、地元にも考古学者がおられるので、そちらの方をお願いして欲しいと返事をしたところ、「明治大学ではこの数年は発掘に参加しないという内部事情があつて断られた。また地元の人びとは保護運動をした立前上、そのような発掘には参加しないということです。とにかく、困却しぬいて東京の本庁へ相談に行ったら帝塚山大学へ依頼したらどうかという意味のことをいわれたので来ました」というのである。

これは重大なことである。とにかく、原目山遺跡の一部分に道路が通り、完全に破壊されるということは避け難い事実であるらしい。誰かが火中の栗を拾わねばならないと思つた。

昭和三〇年を境として、わが国の自動車産業は、めざましく発達し、物資輸送のない手は鉄道よりも貨物自

動車による比率が増大してきたので、東京・大阪間に高速道路を造ることが決められ、まず、大阪・名古屋間に時速一〇〇軒で走れる名神高速道路が建設されることになった。

「高速道路」というものは、ドイツの有名なアウトバーンの話を聞くだけで、ほとんどの人びとには未知のものであった。とにかく、極端なことをいうと、地図上に道路を造るために最も都合のよい場所と思われるところに一本の線が引かれた。道路は何者もなきが如く、山を裂き、谷を埋め、海に橋をかけるというものであった。当然、その道路敷地内にある遺跡は相当数に上った。

今は亡き水野清一博士は、名神高速道路によって破壊される遺跡調査の急務をとき、関係地域の考古学者が集まってその対策が論ぜられた。それは昭和三五年のことである。そのような考古学者の要望を地元の教育委員会も放置することは出来ず、日本道路公団と交渉することになった。それは、まず道路建設地に立入って調査させてもらうという非常に弱い立場でしかなかった。

例えば京都府の場合は、大宅廃寺跡や鳥羽離宮跡を含む八箇所もの遺跡があるということで、道路公団、国、府等をあわせて二百数十万円の調査費を支出した。しかし、それはあくまでも地元の教育委員会が調査費を出し、調査をすべきであるという立場であった。大阪府の場合は、高槻市の木棺や漆塗りの弓を出した土保山古墳は全壊、岡本山古墳では前方部を破壊してしまった。それらは当初より重要な遺跡であることは十分に知られていたもので調査はされた。一方、例えば調査をして非常に重要な遺跡であることが判明したにもかかわらず、おぎなりの調査で終らされたのは「豊中インターチェンジ」内にある島田遺跡である。当時、大阪府教委に対して調査費の増額を要求し、全面的な調査の必要を要請したが、それも「金がない」というひと言で貴重な遺跡の大半は未調査のまま破壊されてしまった。このように推し進められた道路行政による遺跡破壊は許されるべきではな

いという反省が全国的に澎湃として起こってくるのは当然であった。このことは「名神高速道路」に次いで「東海道新幹線」の場合は、事前に地元教育委員会と打合せがなされた。これは遺跡地を保存しようという立場ではなく、むしろ事前に相談して「うまくやろう」という立場であったようにも見受けられた。

このように名神高速道路から東海道新幹線建設までの期間は短いものであったが、その是非は別としても若干の変化が認められる。

一方、地方の一教育委員会の豊かでない財政では調査は出来ない。そこで一応、調査費は受益者負担という線が打ち出された。一旦このような線が出て、受益者が調査費を負担したとなると教委は調査しなければならぬ。しかし、調査員はおらず「定員法」にしばられて容易に正規の技師を増員できない。大規模な調査になると学生アルバイトを使つてその場を糊塗するだけでは納まらないので、ある程度身分の保証をして人を集めるほかはない。そうすると次の段階では、調査員を確保しておくための経費が必要となる。これは、当初から予測できることであつたが、後に深刻な問題もはらんでくる。

ひるがえつてみると「名神高速道路」建設の頃には、豊かでない地方都市の文化財保護財政のため、公団にお百度をふみ、買収地に立入りさせて貰うように頼みこんだことが、いまでは公団や国鉄などの建設側に多額の金を出させて、調査し、工事もストップ、そのあげくのはては保存対策を考慮した工法のとり入れをさせるようにまでなつてきたのである。これは「文化財の保護」ということが広く人びとの間に高まつた結果によるものであると思う。

このように、道路などの新設に伴う遺跡の破壊に対する反対がおきてるとき、北陸自動車道新設の問題が生じてきたのである。地元においては、全国的に注目されている「原目山墳丘墓群」の一画が、道路によって破壊

されるというのだからその保護運動に全力を入れられたのは、当然というべきものであった。

昭和四一年（一九六六）福井市原目町に福井市の上水道の貯水池が建設されることになった。その予定地にまたま、五基の古墳の存在することが知られていた。この付近には九頭竜川の伏流水があり、それを福井市の上水道の水源としようと計画されたのであった。福井市の人口増加に伴って、そこに貯水池を建設されることはやむを得ぬことであつた。そこで、この五基の古墳をやむを得ず、緊急調査することになったのである。

ところが、その調査の結果、初原期の古墳ともいうべき、弥生末期の墳墓であると判明し、特に二号、三号墳といわれたものには、同一墳丘に複数の土壙があり、その内部から、小型の細形管玉や、大刀類や土師器類などが検出されたのであつた。これは、調査当初にはまったく予期されないところであつた。

一方、この原目山丘陵上にはその段階で、その調査されたものを除いてなお、約四〇基の古墳の存在することが知られていたのであつた。

加えて、当時、すでに名神・東名高速自動車道路は開通しており、その道路の重要性がさらに認識され、全国的に高速自動車道路網を拡充する計画が立案されたのであつた。たまたま「北陸自動車道」の計画のなかに、この原目山墳丘墓群を貫通することが発表されたのである。昭和四〇年代の初頭は、国土開発の名のもとに、遺跡が次々と破壊されたときでもあつた。当然、地元の考古学者及び、その行政責任者にあつては、反対の意志を表明したのであつたが、道路建設の名のもとに路線の変更は認められなかったのである。そこで地元の研究者は内外を問わずその保存運動を展開し、破壊される古墳がどれだけの意義をもつものであるかを知らせる意味をもつて、「原目遺跡三七号丘」の調査を行ったのである。

その調査の成果は、ただちに発表された。これによれば、墳丘は、一辺約二〇米の方形で自然丘陵をL型に力

ツティングして造り出し、その周囲にテラスがめぐるもので、その丘上には一〇基の土壙が存在し、共同墓地的な性格をもつものであることが明らかにされたのである。その時期については墳頂部及び、墳丘の裾部のテラスから、高杯、壺形土器の古式土師器片の出土したことから、古墳発生期すなわち、弥生時代末期の墓で「方形台状墓」であると認定されたのであった。このことからさらに原目山遺跡は重要な遺跡として浮上してきたのであった。

このように良識ある保存運動を盛りあげる試みがなされたのであったが、無情にも、路線は変更されなかったのである。

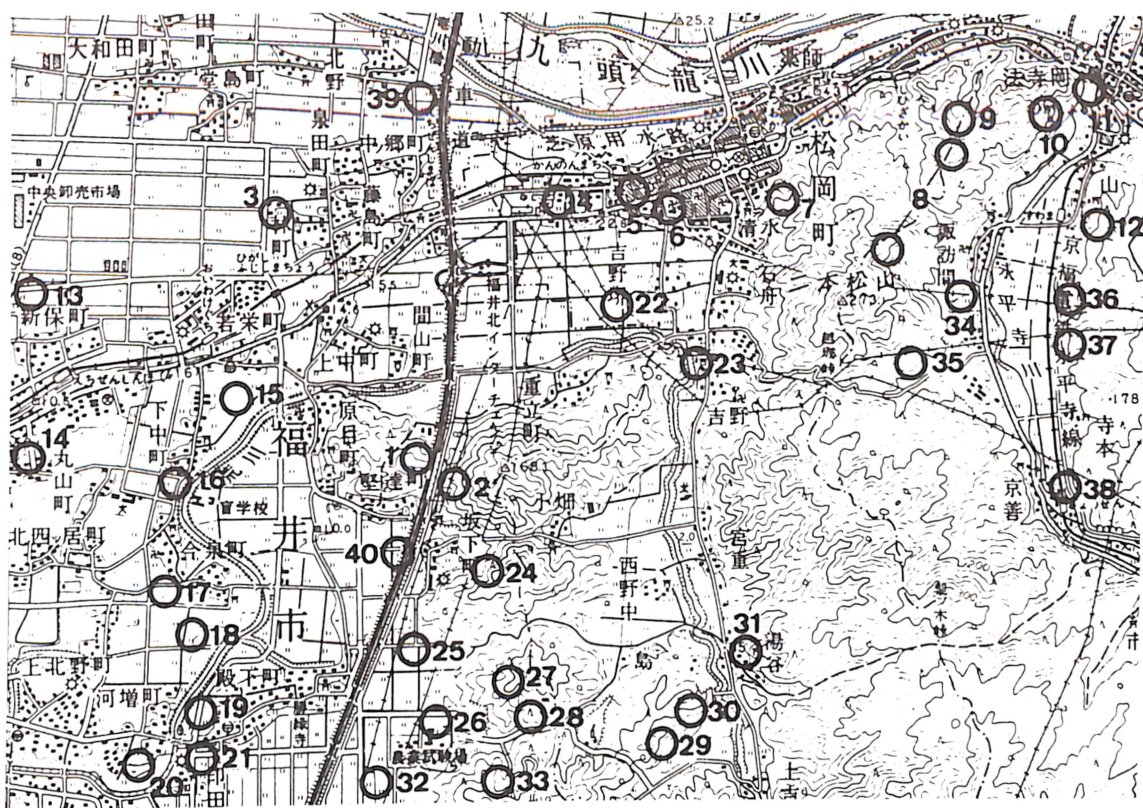
地元における保存運動の熱はいやが上にも盛り上がったのであったが、路線変更は認められず、原目山墳丘墓群の一部と重立山古墳群が破壊されることが決定的となったのである。

事態はさし迫っており、放置しておけば最悪の結果を招くのは明らかであった。誰かが調査を引き受けなければならぬ。そのまま放置しておくべきでない。私は明治大学へ行き、大塚初重教授に会ってその間の事情、いきさつを聞き、また地元の考古学研究会の代表の方と会った結果、調査を引き受けることにした。

二 原目山墳丘墓群・重立山古墳群の位置・環境

原目山墳丘墓群・重立山古墳群は福井市原目町・堅達町・重立町にある。地元では、原目山・重立山とよばれる丘陵上の尾根に連なって存在する。

この地は、国鉄北陸線「福井駅」の東北約五軒の位置にある。現在、北陸自動車道の「福井北インターチェン



1. 原目山墳丘墓群 2. 重立山古墳群 3. 林遺跡 4. 出口遺跡 5. 泰遠寺古墳 6. 葵遺跡
7. 弁財天谷窯跡 8. 松岡古墳群 9. 手繰ヶ城山古墳 10. 堂谷古墳 11. 東古市古墳群
12. 大畑古墳 13. 新保遺跡 14. 丸山古墳 15. 上中遺跡 16. 下中遺跡 17. 北今泉遺跡
18. 東今泉遺跡 19. 殿下遺跡 20. 河増遺跡 21. 印田遺跡 22. 塚の下遺跡 23. 八幡神社古墳
24. 坂下古墳 25. 寮A遺跡 26. 寮B遺跡 27. 寮古墳群 28. 名称不明 29. 松岡古墳群吉野支群
30. 下掛田遺跡 31. 湯谷古墳 32. 河水遺跡 33. 河水古墳群 34. 諏訪間窯跡 35. 興行寺跡
36. 山崎遺跡 37. 木原町遺跡 38. 源徳遺跡 39. 北野上遺跡 40. 坂下遺跡

第1図 原目山墳丘墓群・重立山古墳群の位置と周辺遺跡分布図

「ジ」の南へ約一軒のところである。

福井市の中央部は、主として九頭竜川、足羽川、日野川等に運ばれた砂礫の堆積によって形成された平野に位置している。

福井平野は、東から西へむかつて傾斜する第三紀の沈降性地勢であったが、海面低下と、河川の堆積作用によって発達した。

当然、全国的に認められる縄文海進以降、海面低下とともに発達したのであり、したがって、縄文時代には未だ、一部が湖沼地の状態であったと考えられるのである。そのことは、北堀貝塚、舟津・井江葭貝塚等の

立地や、貝塚を構成している貝類によって知られるところである。この福井平野は、弥生時代に入って速やかに平野化し、九頭竜川、兵庫川等の自然堤防上や微高地に住居を営んだ林遺跡、番田遺跡などはそのよい例である。

この平野を中心として、次の段階に、王山、長泉寺山の台状墓群、足羽山古墳・鼓山古墳等の前方後円墳等が現われてくるのである。

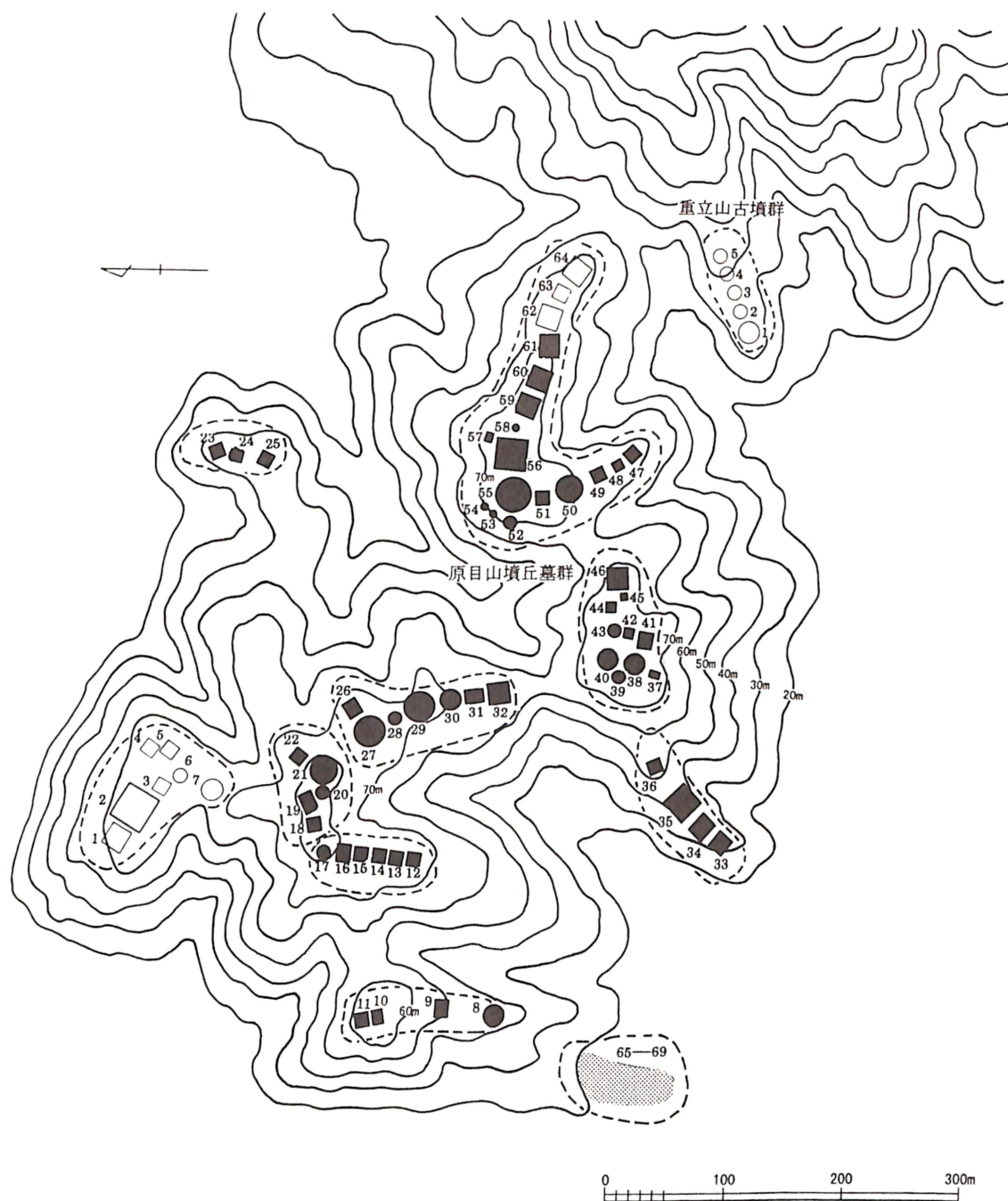
原目山墳丘墓群・重立山古墳群のある周辺部は、九頭竜川が山間部から平野部に流入するところで、早く平野が形成され、林遺跡をはじめ低地性の遺跡が多く残されている（第1図）。

三 原目山墳丘墓群の構成

原目山墳丘墓群は、吉野ヶ岳（五四七米）の山麓部で福井平野に向かって脚状に発達した北端の支丘の末端部近くにある。

昭和四一年（一九六六）にこの支丘の西端部福井市原目町地籍で福井市の上水道用貯水池がつくられるため、周知の五基の古墳の緊急調査が行なわれた。

調査の結果は驚くべき事実を明らかにした。単に一小規模の古墳であると考えられていたものが、弥生末期の墓であると判明したのである。その詳細についてはまだ報告されていないが、福井県教育委員会「原目遺跡三七号丘発掘調査報告」昭和四六年（以下「原目遺跡」とする）の報告にその一部が記されているので、それに基づいて以下簡単に述べてみよう。



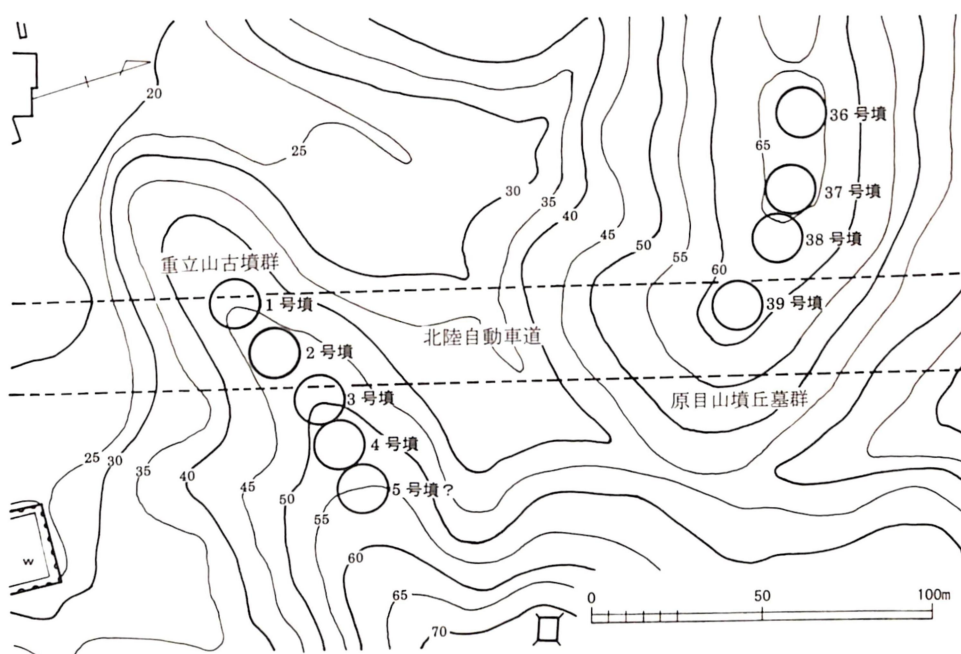
第2図 原目・重立山付近遺跡分布図

第1表 原目山墳丘墓群および重立山古墳群一覧

原目山墳丘墓群											
支群	号数	墳形	径or長さ (単位は米)	高さ	備 考	支群	号数	墳形	径or長さ (単位は米)	高さ	備 考
北群	1	方	約20.0	約4.0	旧1号丘、方形台状墓、調査後消滅	南群	37	方	約5.2×約9.5	約0.7	低平
	2	方	約30.0	約5.0	旧2号丘、方形台状墓、調査後消滅		38	円	約19.3	約3.3	
	3	方			旧3号丘、方形台状墓、調査後消滅		39	円	約11.0	約1.7	40号墳の裾を削っている
	4	方			旧3号丘、方形台状墓、調査後消滅		40	円	約19.8	約4.1	
	5	方			旧3号丘、方形台状墓、調査後消滅		41	方	約15.4×約16.0	約3.0	
	6	円	約13.0	約2.0	旧4号丘、調査後消滅		42	方	約9.8×約12.0	約2.0	
	7	円			旧5号丘、調査後消滅		43	円	約11.7	約2.0	不整円形
	8	円	約16.8	約2.4			44	方	約11.0×約10.3	約0.7	低平
西群	9	方	約14.3×約11.7	約1.5		45	方	約6.8×約7.0	約0.6	方形周溝墓	
	10	方	約12.2×約8.4	約1.5		46	方	約14.5×約16.3	約2.6		
	11	方	約13.0×約11.2	約1.4	北西部が崩れている						
中央西群	12	方（？）	約17.0	約3.0	あるいは円墳か？	東群	47	方	約11.0×約12.9	約2.2	
	13	方（？）	約14.7	約2.0	あるいは円墳か？		48	方	約8.1×約8.1	約1.3	
	14	方	約13.9×約12.0	約2.1			49	方	約14.2×約12.7	約1.5	川原石あり
	15	方	約15.0×約12.0	約1.4			50	円	約26.0	約5.0	
	16	方	約14.8×約15.0	約1.5			51	方	約14.2×約13.5	約2.5	
	17	円	約11.3	約1.5			52	円	約8.5	約1.4	55号墳の裾を削っている 墳丘流失
							53	円	約5.8	約0.8	
中央中群	18	方	約14.7×約14.2	約2.8			54	円	約6.3	約0.5	
	19	方	約12.5×約17.4	約1.5			55	円	約28.3	約4.6	
	20	円	約12.7	約1.5			56	方	約31.2×約30.3	約5.3	
	21	円	約22.4	約3.0			57	方	約10.5×約5.7	約2.0	方形遺構か？
	22	方	約11.1×約10.0	約1.5			58	円	約8.0	約1.3	
北東群	23	方	約9.8×約9.6	約2.2	旧42号丘		59	方	約24.0×約17.6	約5.0	
	24	方	約9.2×約9.6	約1.7	旧41号丘		60	方	約25.0×約19.0	約3.5	
	25	方	約12.8×約12.8	約1.0	旧40号丘		61	方	約24.0×約18.0	約4.5	
中央東群	26	方	約13.0×約16.5	約2.2			62	方	約17.2×約20.1		旧37号丘、調査後消滅
	27	円	約26.2	約3.5			63	方	約25.6×約22.45	約4.0	旧38号丘、調査後消滅
	28	円	約13.6	約2.2			64	方	約28.2×約22.5	約3.0	旧39号丘、調査後消滅
	29	円	約24.0	約3.2			65～69		不明	不明	伝 未調査で消滅
	30	円	約13.2	約2.3	崩れている		重立山古墳群				
	31	方	約15.0×約18.8	約2.0	崩れている						
	32	方	約16.8×約18.2	約1.5	崩れている						
	南西群	33	方	約12.5(？) ×約16.7	約1.7	北西部が削られている	古重墳立山	号数	墳形	径or長さ (単位は米)	高さ
34		方	約18.8×約16.3	約2.7		1		円	約24.0×約20.0	約3.5	調査後消滅
35		方	約23.0×約24.0	約4.5		2		円	約23.0×約20.0	約2.0	調査後消滅
36		方	約12.7×約11.7	約2.6		3		円	約17.5×約16.5	約1.0	調査後消滅
						4	円	約15.0×約15.0	約2.2	調査後消滅	

ら弥生土器片が出土した。

五号丘の墳丘は、楕円状、土壇があつて副葬品はなかった。



第3図 原目山墳丘墓群・重立山古墳群分布図

原目一・二・三・四・五号丘の調査

一号丘の墳丘は、一辺約二〇米、高さ約四米の方形状。埋葬施設は、東西に長軸をもつ長さ約四米の大型の土壇である。副葬品は土壇内から、太刀一、小太刀一、細形管玉三二三個・ガラス玉七二八個、墳丘上部から裾部にかけて多量の土師器が出土した。

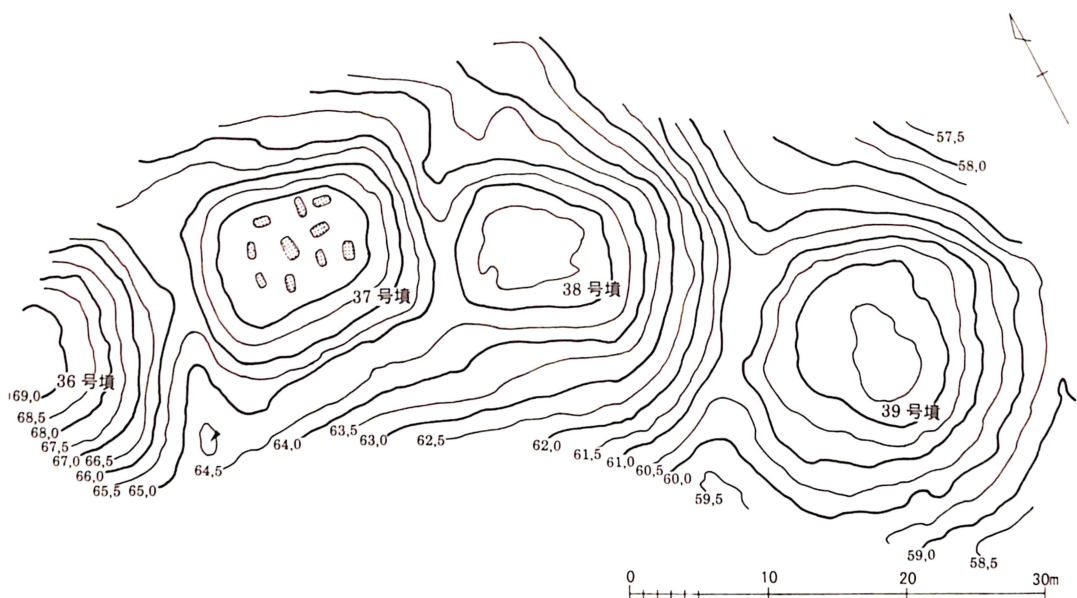
二号丘の墳丘は、一辺約三〇米、高さ約五米の方形状。埋葬施設は、東西に長軸を持つ土壇が五基である。

副葬品は三号土壇を除いて剣、銅鏃、素環頭太刀、各土壇の上面から土師器が出土した。

三号丘の墳丘は、一辺約三〇米の方形状。この上に一辺が約九米の三基の方形周溝墓と一二基の土壇である。

副葬品は、鉄器、古式土師器が出土した。

四号丘の墳丘は、径約一三米、高さ約二米の円形。埋葬施設は、東西に主軸をもつ幅約〇・四五米、長さ約三米の長方形の土壇である。副葬品は、土壇内や、溝内か



第4図 原目山墳丘墓群地形図

これら五基の墳丘墓から、この遺跡が弥生時代から古墳時代に移る過渡期の墓であると考えられたのである。今日からみれば非常な卓見であったといえよう。

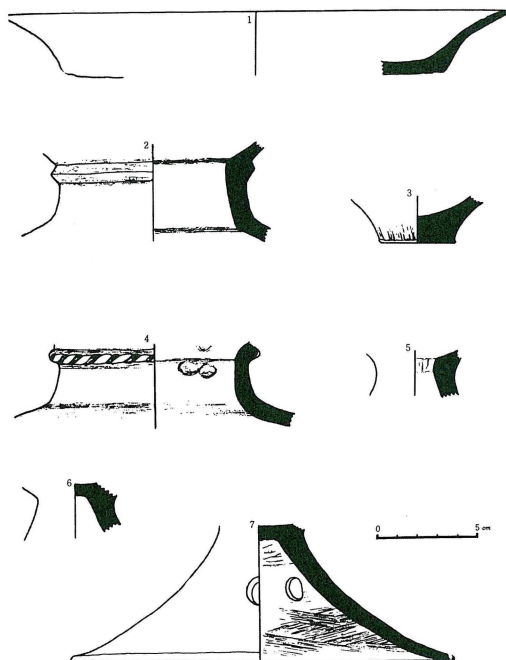
さらにこの報告書のなかに、原目山地区において、四五個所の墳丘墓群、五基の重立山古墳群の分布図を記載し、その意義を高らしめている。

原目山一号丘から五号丘までの調査と墳丘の分布調査とあいまってその重要性を問うために、さらに墳丘墓群のなかから、外部の観察によって、原目山二号丘と類似するものとして、原目山三七号丘が選ばれたのであった。

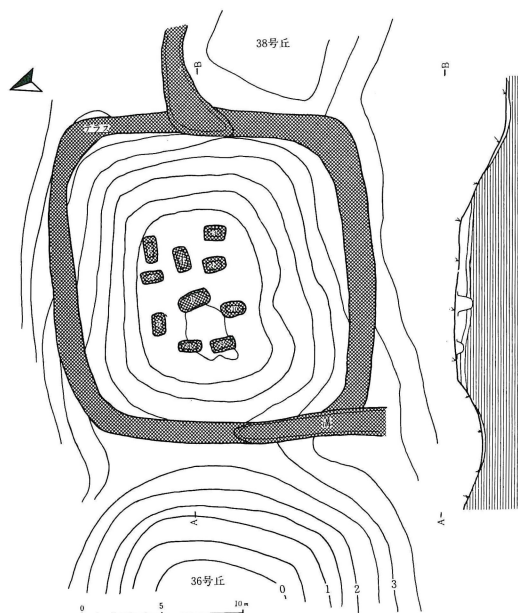
調査は、昭和四五年七月二六日から八月三一日まで約一ヶ月にわたって行なわれた。そのことについて「原目遺跡」の報告書から略載してみることにする。

原目山三七号丘の調査

三七号丘の墳丘は、高さ四米、一辺一七米の方形丘、自然丘陵を方形に切削して、上部に約八×二〇纏盛土して造営したもので、墳丘平坦部に一〇基の土壇が発見された。盛土は埋葬後のものではなく、埋葬以前に墓域としての方形状台地を造ったもの



第6図 原目山墳丘墓 37号墳出土土器
(拠「原目遺跡」)



第5図 原目山墳丘墓 37号墳墳丘遺構
実測図 (拠「原目遺跡」)

であるとし、なお、墳丘のまわり裾部に、テラスがめぐらされている他に排水的機能をもつ溝がつくられ、そのなかから土器が出土した(第5図)。

土壇の規模は、一号土壇については長さ二・一米、幅一・〇米であるが、二号～一〇号土壇は長さ一・五米、幅〇・八米で、その土壇の長さから、「横位屈葬法」であつたと推定している。なお、これらの土壇が断続的に造られたとき、すでに埋葬された位置に標識として、「立石」・「組石」があり、一角礫石組、

二角礫標石、三河原石標石、四河原石立石があり、一から四までの発展段階があるとしている。

出土遺物は、土壇内からは一点もなく墳頂部、テラス部、西溝部から壺形土器片、高杯形土器片等の古式土師器が出土した(第6図)。

以上のことから、調査者は弥生時代終末における特定集団の共同墓と考え、原目一～五号丘と原目三七号丘とは類似すると指摘した。

これらの一連の原目山墳丘墓群の調査によって弥生時代末期の墓制に対する問題意識が高まり、その重要性が認識されたのである。

そのような状況下にあるとき、「北陸自動車道」建設によって破壊されることになり、事前調査を実施することになったのはすでに述べた通りである。

その後、福井県教育委員会によってさらに精密なる分布調査が行なわれ、総計六九個所の墳丘墓を確認した（過去に消滅したものを含める）。その内訳は、北群七個所、西群四個所、中央西群六個所、中央中群五個所、北東群三個所、中央東群七個所、南西群四個所、南群一〇個所、東群一八個所、西先端群三個所というようにこの原目山墳丘墓群を群構造としてとらえようと試みられたのである（第2図・第1表）。

四 重立山古墳群の構成

重立山古墳群は、原目山墳丘墓群の存在する丘陵の南側に谷を一つへだてた西南に延びる丘陵上に存在する（第3図）。

重立山古墳群からの眺望は南に開け、福井平野の広大な水田地帯を見おろす場所にある。この原目山と重立山の尾根は連結するものであるが、尾根筋が両者相對するようにみえる。すなわち原目山は西から東へ降る尾根筋であるが、重立山は東から西南方向に下降する尾根筋である。重立山古墳群は、この尾根の上に造営されているのである。

当地の古墳群の分布調査では、この尾根上に五基の古墳が存在することが確認されたとしているが、そのなか

でも、いわゆる、五号墳については、古墳として確認するには問題があるとされたのである。

第3図に示すように、原目山墳丘墓群の特に三九号墳と重立山古墳群の四号墳とは、直線距離が約一二〇米であり、近くに存在するのである。

原目山墳丘墓群にあつては初原期古墳と認められるものであつたにもかかわらず、重立山古墳群は古墳時代のものであると認められていた。

墳丘墓が接して連続して、むしろ、同一地域内と考えられる場所において、時代を異にするものがあるのである。このことから、古墳群築造の際に、先の墳丘墓を破壊して、その上に古墳が造られたのではないかという疑問も生ぜざるを得ないことであつた。

古墳群の分布は尾根が狭小であつたところから、古墳が尾根上にほぼ一直線上に造営されていたのである。

また、五号墳とみられた場所から東側は高くなっているだけではなくして、尾根が拡がつて平坦になつており、古墳を造るとすれば、尾根が平坦に移行すれば単に一列だけではなく、並列もしくは広範囲に亘つて古墳を築造することが可能であるにもかかわらず、ここでは問題のある五号墳を加えても五基の古墳だけになるのである。

一応調査に先立つて、古墳の号数を付けるについて、これまで、分布調査で付けられた古墳番号に従うことにしたのである。すなわち、丘陵の末端近いものを一号とし、丘陵を上がるに従つて、二号、三号、四号、五号と名付け、それに基づいて調査を行なうことにしたのである。

第二章 原目山三七号墳

一 調査までの状況

三七号墳は、昭和四五年（一九七〇）福井県教育委員会による「原目遺跡発掘調査団」によつてすでに、調査を完了したものであつた。しかし、その際の調査が、あくまでも、墳丘を破壊せずに行なわれたとはいえ、それは建前で、その報告書「原目遺跡」によれば、完掘といつてもよい調査であつた。

しかし、この度の調査は破壊、消失を前提としているので、再調査をすることになった。調査に先立つて先の調査の責任者に、御指導を迎ぐべく参加をお願いしたが、承諾を得られなかつたので、その報告書をもとに、現状と比較検討することから始めねばならなかつた。さいわいにして、土壙もそのままの状態であつた。他人の行なつた調査のあとであり、特に問題を投げた遺跡の再調査というものは当初から精神的に圧力を受けるものである。とにかく、一応、先の調査成果の確認という仕事から始めたので予想外の時間を費やした。

二 調査の経過

三七号墳の調査は、まず昭和四五年の調査終了段階までに現場を復旧してから始めなければならなかつた。その調査の経過を日誌からみてみることにする。

昭和四七年

七月一七日 墳丘の清掃。

七月一九日 ヘリコプターで撮影。

墳丘四分割、トレンチ設定。

墳丘の軸を磁北に合わせる。

幅約三〇糎の土堤を残して四等分して表土を剥ぐ。

昭和四八年

三月一六日 晴れ。墳丘の断面図をつくるため、1区の上層を除去している段階で、以前の調査の際、土壙

と考えられたその下層の暗黒色土層の中に赤褐色土の落ち込みが現われた。

三月二四日 曇りのち雨。三六号墳に接して、墳丘の中央に向かって、東西線に幅約六五糎のトレンチを掘る。礫を含んだ赤褐色粘質土層が出てくる。

三月二五日 大雪のため作業中止。

三月二七日 二四日に設けたトレンチの延長線上に幅約六〇糎のトレンチを入れる。礫まじりの赤褐色粘質土層はおそらく地山とみられる。

三月二九日 墳頂部に南北約一・五米、東西約一・三米の遺構が確認出来た。

三月三一日 南側に入れたトレンチの断面をみると、礫まじりの赤褐色粘質土が落ち込んでいる。

四月二五日 東西壁を除去、長さ約四・八米、幅約一・二米の土壙を検出。木棺直葬の可能性が大である。

三六号墳と三七号墳の間の溝を探すが溝状のものはなかった。

四月三〇日 調査終了。

三 外部構造

墳丘の規模・形態・構造（第7・8図）

三七号墳は、丘陵の尾根にそつて主軸をとる標高六七米に位置する墳丘である。その長軸は東西約一六米、南北約一二・五米、高さ約二・六米の規模で、主軸と短辺との長さの差は約三・五米あり、方形というよりはむしろ尾根に沿つた長方形をなす墳丘である。高さについては、従前の調査においては約四米と測られていたが、現状ではそれより約一・四米低い。

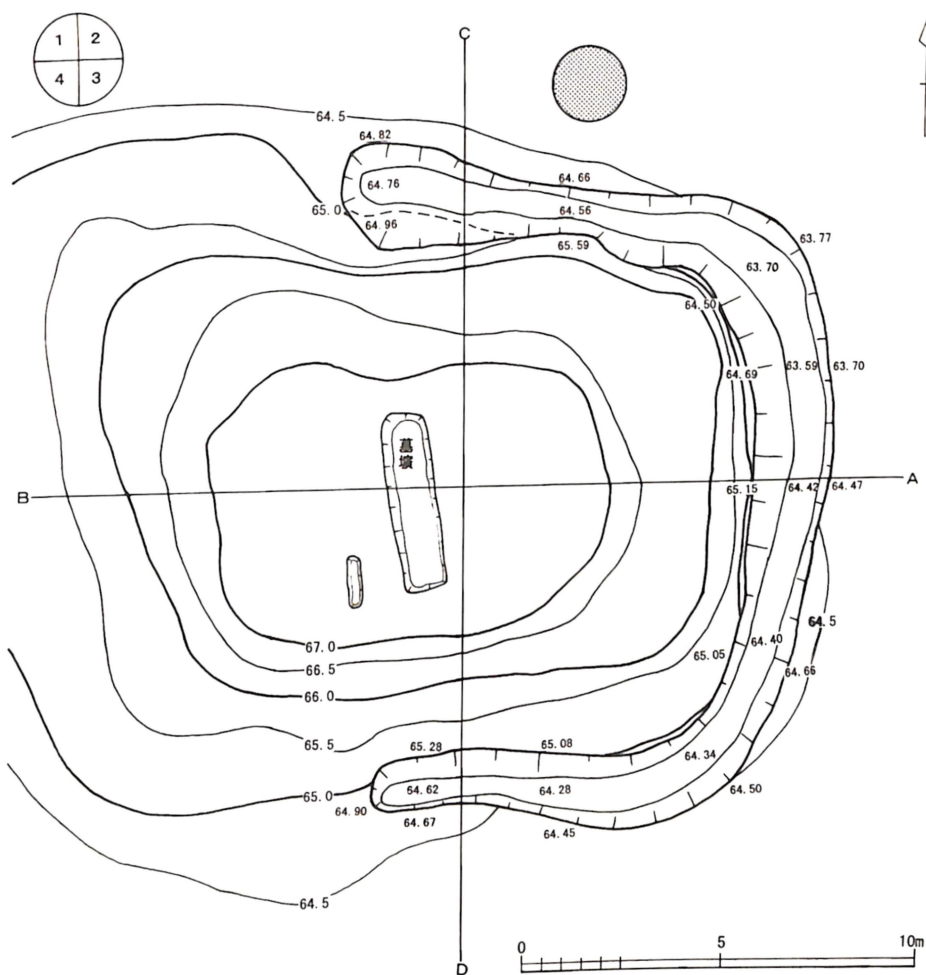
墳丘の基盤をなす岩盤は、墳丘の東西線上で基底部から約一・三米、その上に盛土が西側で約五〇糎、東側で、約一・〇米でその差は〇・五米である。すなわち、もとの地山が低い東側に盛土は厚くなっているのである。また墳丘の南北線で地山は約一・六米、盛土は両端とも約一米でその差はない。すなわち、尾根を横断する線であるから、ここでは差がないと考えられる。

さらに墳丘の断面からみれば、三六号墳と区別される部分は、地山の線が、そのまま、凹凸なしに傾めに上がって行くものとすれば約一・二米、岩盤を掘り下げていることになる。南北線は、自然丘のままである。

調査の際に、三六号墳との境は、岩盤が直接露出していたことによつても判断された。

周溝の範囲・規模（第8図）

先述したように、西側の三六号墳との境は、墳丘造営当時相当深く掘削しているが、われわれの調査の際、

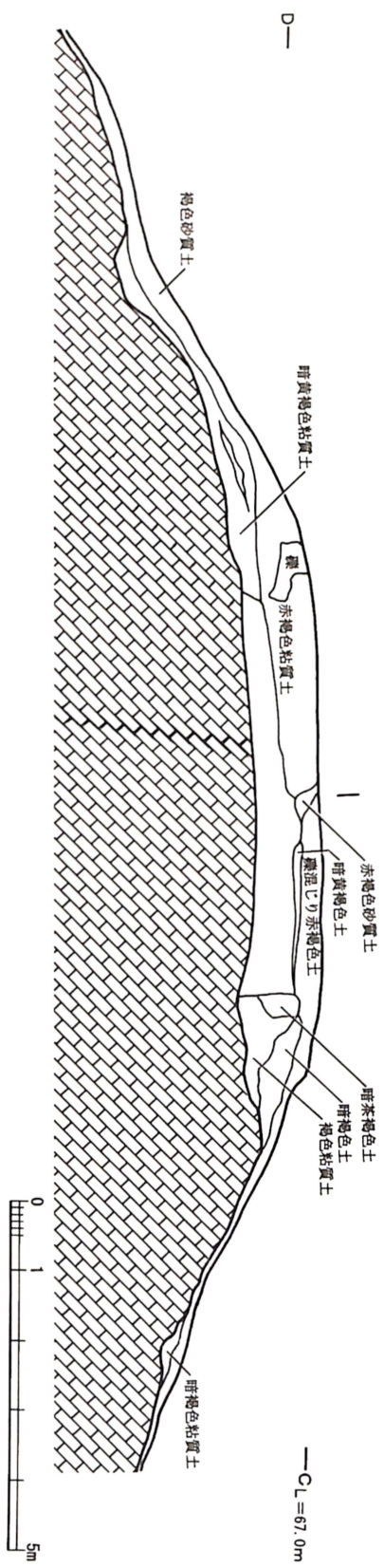
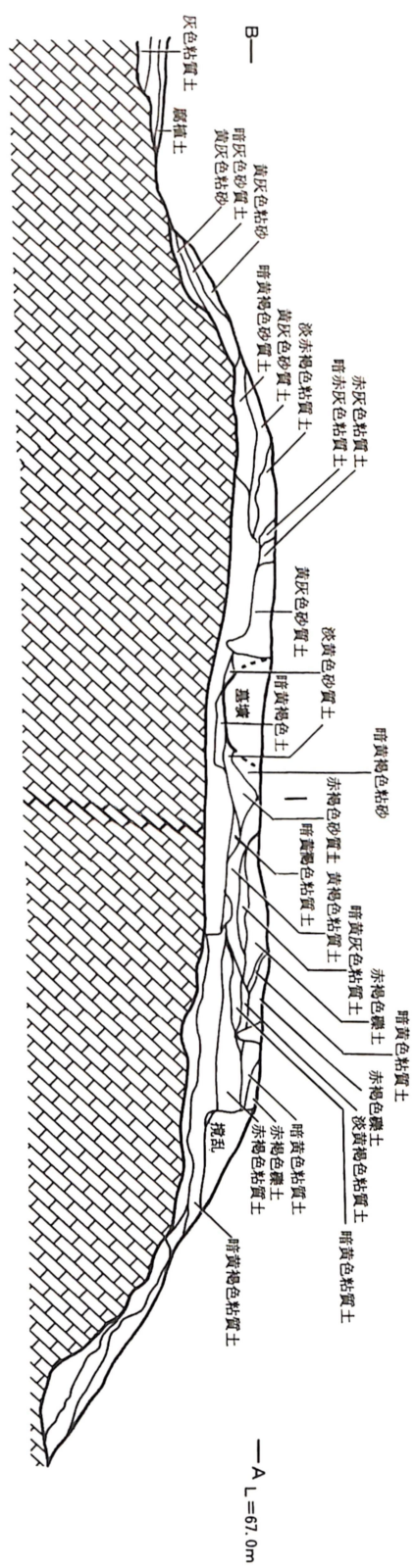


第7図 37号墳墳丘実測図

地山が何處まで下がって行くのか、三六号墳の裾部とどの様に接するのかは、三六号墳の墳丘裾部の調査が出来なかったので不明である。

しかし、東側と南・北側においては地山を掘削して溝をつくっていた。

溝の東側では幅約二・一米、深さ約五〇糎（溝の上端部を結び中央部で垂直に下ろしたところ）、墳丘を形成するのに地山を約四〇度の角度で削っており相当の急傾斜であるので、溝は実際より深く感じられたであらう。



第8图 37号墳墳丘断面图

南側では溝の幅は約一・六米、深さ約〇・四米、北側では、溝の幅は約一・一米、深さ約〇・二五米である。

このように、三七号墳の墳丘は、相当量の土量と岩盤とを掘削して造られているのである。

この墳丘の調査の結果、昭和四五年年度の調査の際に発見されたテラスや溝といわれるものは、掘りかたが足らずに堆積土そのものであり、築造当初はもつと深いものであったことが判明したのである。

遺物出土状況

墳丘の北東部裾部、溝より外側で、土器片が出土した。これは恐らく三七号墳のどこから流れおちたものとみられる。昭和四五年の調査の際には、墳丘部及び、溝内から多くの土器類が出土しているが、此の度の調査では数片にしか過ぎなかった。

先述した如く、先の調査の際に出土した土器類は、墳頂部は別としてもいわゆるテラス、溝というものは、堆積土しかも上部の方から出ているものであるから、ある程度土砂堆積が進んでから土器が流入したとみられるのである。このようにみれば土器の原位置は、不明であると言わねばならないだろう。

出土遺物各説

土器 土師器片

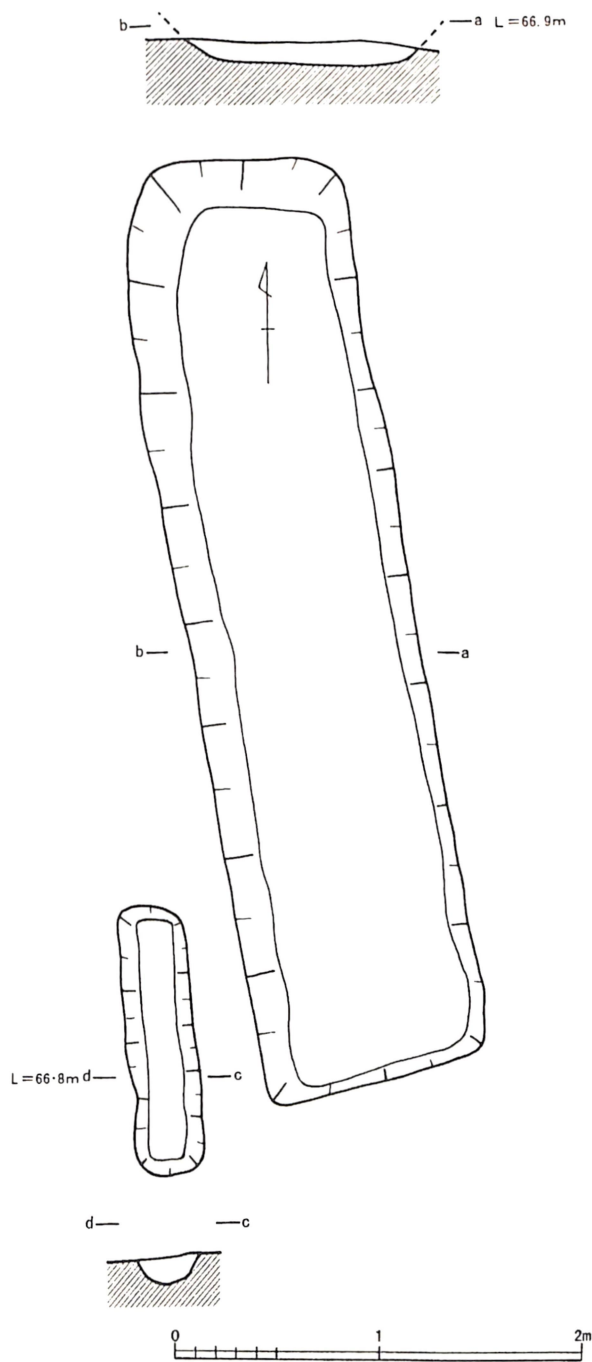
四 埋葬施設の構造

埋葬施設の形態・規模・構造（第9図・10図）

調査は、墳丘の全域を表土から順次グリッド別に掘り下げてグリッド境を土堤で残す方法をとった。勿論、昭和四五年度の調査の際に検出された一〇基の土壙以外にも存在するかどうかを慎重に検討しながら調査を進めたが、それらしきものはなかった。また、その一〇基の土壙についても、発掘されてから年数も経っているので、その追認すら出来なかった。

調査を進めて行く段階で、一〇基の土壙の底部と決められたところは盛土の土層の変わるところであると判った。この上面の層は、著しく礫石を含む土で、墳丘の盛土のなかに土壙を掘り込めるような性質のものではなかった。

表土下約五〇糎で、礫をあまり含まない赤褐色土に達するが、その上面を削平したところ、そこからは上層の



第9図 37号墳埋葬施設実測図



第10図 37号墳墓壙（北西から）

一〇基の土壙と全く関連しない土壙が大小二基検出されたのである。ここでは大型の土壙を第一墓壙、他を第二墓壙と呼ぶことにする（第9図）。

第一墓壙は長軸を北西位にむけ、墳丘の中心より約一米西側によっている。その規模は長軸約四・五米、幅約一米である。

第二墓壙は、第一墓壙から南西位約一米にあつて長軸約一・三米、幅約〇・三米のものである。

第一墓壙は、おそらく割竹型木棺状のものを埋葬したものであろうが、第二墓壙は小児を入れたものかは不明である。

このように、第一・第二墓壙の検出は昭和四五年に調査された一〇基の土壙とどのように関連があるのか考えねばならない。

第三章 原目山三八号墳

三七・三八号墳のある丘陵は、北へ向かって円弧を描くような状態である（第4図）。当然その尾根上に築造された墳丘は、特に方形状をなす場合には、地形に大きく制約を受ける。この三八号墳は、三九号墳に較べて南へ主軸を振っているのである。

一 調査の経過

調査の経過は日誌にもとづいて述べてみる。

昭和四七年

七月一七日 プロトン磁力計で測定。

七月一九日 墳丘を四分割の後、約三〇糎幅の土堤を残して表土を剥ぐ。

七月二〇日 表土を剥ぐ。2区墳頂部に土質の少し変わったところがあり、粉々になった土器片が検出された。

表土を剥いで行くに従って、石の集まっているところ、特に3区から4区において幅約一八〇糎で石が環状に集積しているように見えた。

七月二三日 表土剥がしを続行する。墳頂部を中心にして、約三米下がったところ、1区・4区・3区と礫石が取り巻くようであった。2区では表面に石が約一〇個固まっていた。三七号墳との境に黒色土の堆積がみられた。

七月二四日 3区・4区の礫石はあたかも組合せたような状況である。2区の礫石の間から土器片が検出され

た。墳頂から北へ約二・八米、そこから東へ約七・二米（グリッド線上に沿って）の地点である。

七月二五日 4区の裾部、三七号墳との境近くで黒色土を剥ぐと礫石が出てきた。また、4区において赤褐色

を帯びた土器片を、墳頂から西へ約五・八米そこから南へ約四〇厘の位置（グリッド線上）において検出した。

七月二六日 4区の裾部において土器片と土器底部を検出する。墳頂から約八米下で、東壁から約六米西の位

置である。この4区においては表土下約五〇厘に、三段目の礫石があるようにみえる。

七月二七日 4区の調査を重点にして行なった。3区・4区の礫石の状態からみれば、これらは明らかに人為的な積石とみるべきだろうと判断を下した。

七月二八日 4区で土器片を検出した。

八月二日 墳丘の基底部を追求。地山の赤土を捜す。

八月三日 全景の撮影と部分撮影を行なった後、壁面のセクションをとる。2区の南壁（東西線）墳頂部よ

り東へ約六米のところに内側に傾斜する切れ込みが現われ、その土層のなかに炭細片が混入していた。さらにその下は暗赤褐色土層が現われたのでそれより上層は盛土と判明した。また、2区の墳頂部より東へ約六米、北へ約四・七米と四・九米のところから土器片が検出された。

八月五日 2区のほぼ中央で長さ約四・九五米、幅約〇・二五米、高さ約〇・六米を残して掘り下げた。墳

頂部から約四・二五米のところに、幅約七〇厘の切り込み状のものが、内に傾斜する方向にあった。これも土壇の掘り込みであるのか、盛土の過程で出来たものであるのか、明らかにすること

はできなかったが、いままでのところ墳丘全体についてみれば、墳丘の中央に向かって切り込みがあるようにみえるのである。

八月 七日

墳頂部付近には礫石がないため、4区グリッドの中間に、幅約一〇厘の土堤を残して掘り下げた。

その結果、1区の部分は抜けているがその他は礫石を馬蹄形に積み上げ中央に向って播鉢状の形態を示すものであることが判明した。

八月 八日

墳頂部を中心にして積石の輪郭を追う。その結果、東西の長軸は約四・五米、幅約二・五米、三米の長方形をなすものであることが判明した。しかし、この積石は西側（山手側）は東に較べて高く、その差は約一米を測った。これらの墳丘の調査を通じて、三七号墳にいわれたような土壇は全く存在することなく、積石による埋葬施設（礫槨）と考えざるを得ないものが検出されたのであった。底部から遺物は何等検出出来なかった。

八月 一二日

晴れ時々曇。墳丘の積石の状況を撮影、出土した土器類を取りあげ、実測にかかる。

昭和四八年

三月 四日

昨年に墳丘を埋め戻し、調査を一旦中止したが、今日から調査を再開。まず埋土の除去から始めた。

四月 六日

4区を掘り下げ、礫槨内の棺の有無を調べるため少し削平した。

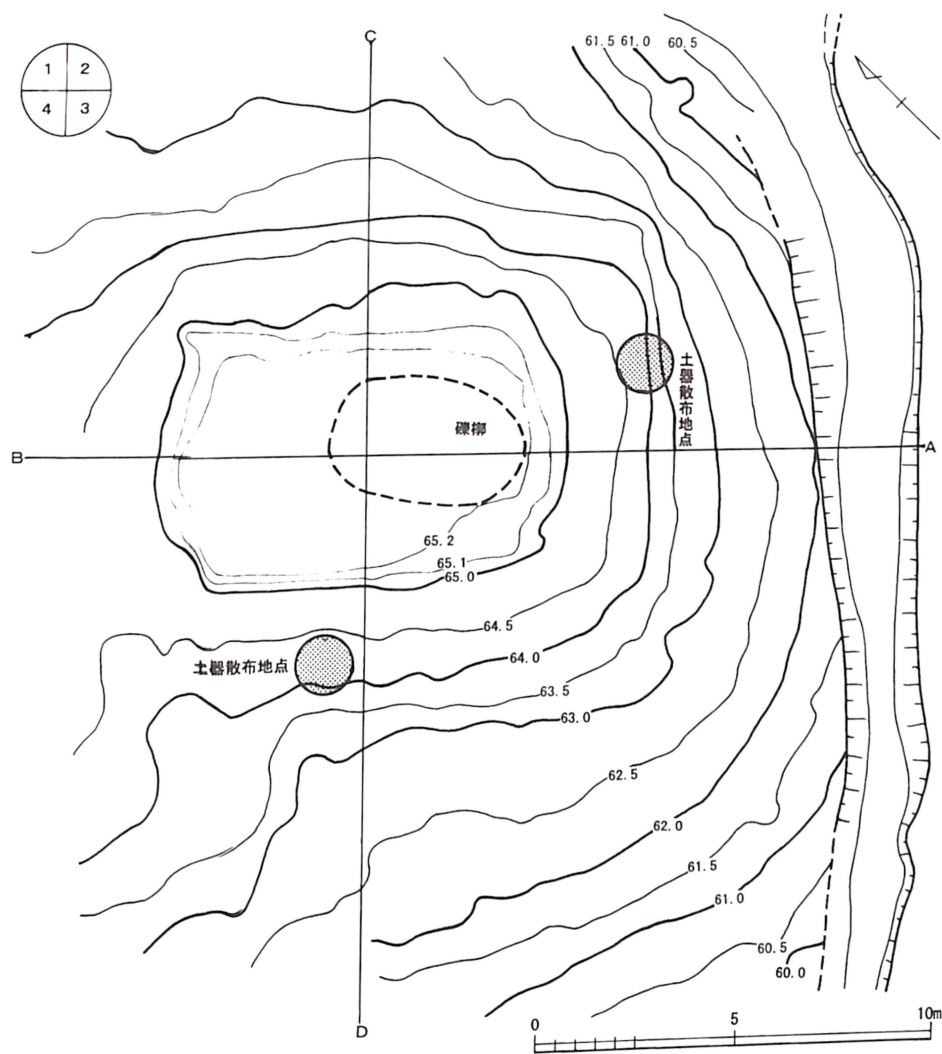
四月 九日

パワーショベルで3区の底面まで掘り下げる。三九号墳との境の溝はかなり深いことが判った。

四月 一八日

3区において溝の上縁部幅約一・七八米、底部の幅約〇・六五米の規模のものであると判明した。

二 外部構造



第 11 図 38 号墳墳丘実測図

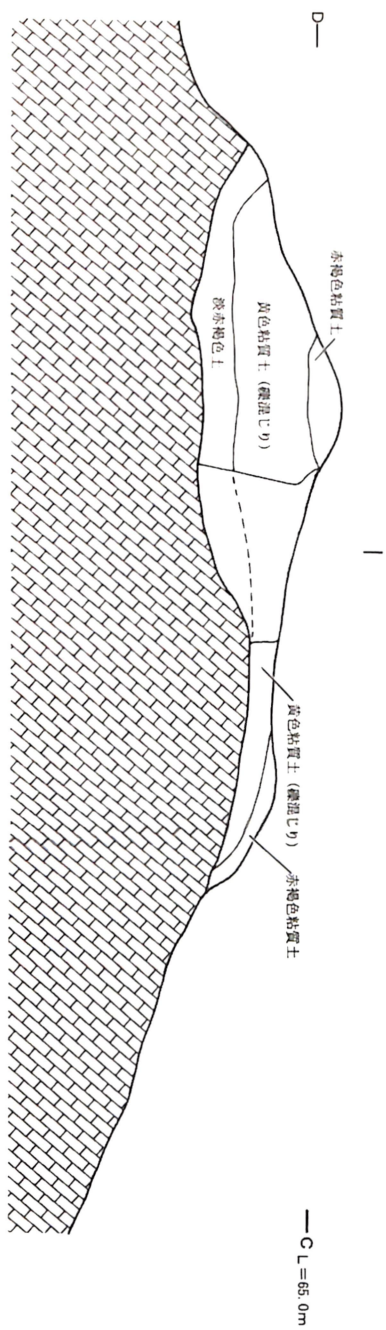
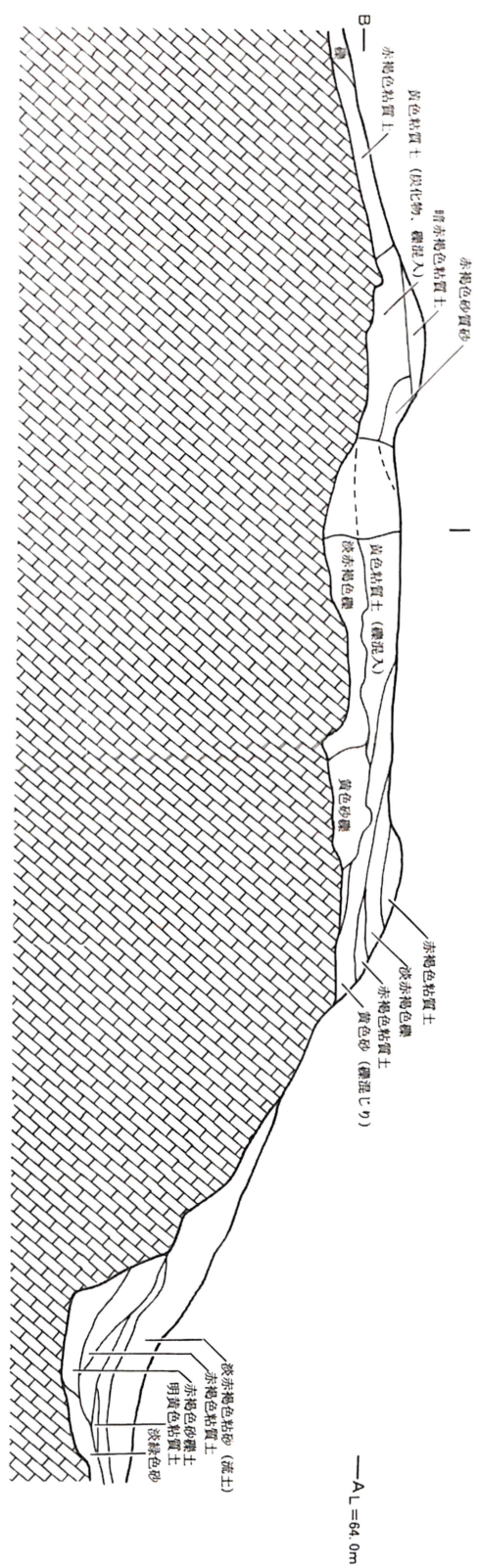
墳丘の規模・形態・構造

(第 11・12 図)

原目山三八号墳は、標高約六五・二米に位置し、尾根にそって主軸をとる墳丘の主軸は磁北に対して南へ約四五度振る。

その規模は、東西の長さ約一九米、南北の長さ約一二米、高さ約三・六米であるので、すなわち墳丘の主軸と横幅との差は約七米でまったくの長方形といわざるを得ない。

墳丘内の地山の高さは基底より約二・七米あって、盛土は〇・九米であるが、



第 12 図 38 号墳丘断面図



南北の断面によると南側斜面は約二米ある。これは、自然地形において地盤が凹んでいたためだと考えられる。

三七号墳と三八号墳が隣接する西側は三七号墳の周溝の高さによつて、三八号墳の西側は自ら決定したと思われる。すなわちそこを深く掘り下げるとは、三七号墳の溝を破壊するということになるので、その点を考慮したと考えられるのである。その分、前面部を深く掘り下げる結果となつたのである。ちなみに、地山の傾斜角は約七度であつて、墳丘の中腹の傾斜角は約三〇度で、その差約三・一米掘削したことになるのである。

周溝の範囲・規模（第12図）

周溝の範囲は東側から北側にかけて、幅が約三・四米、長さ約一四米でよく残つていた。

南側は、尾根が丘陵の先端に近づくにしたがつて細くなるので、溝を巡らすことは地形的に困難であつたと判断されるのである。この意味からいえば周溝とはいいい難い。

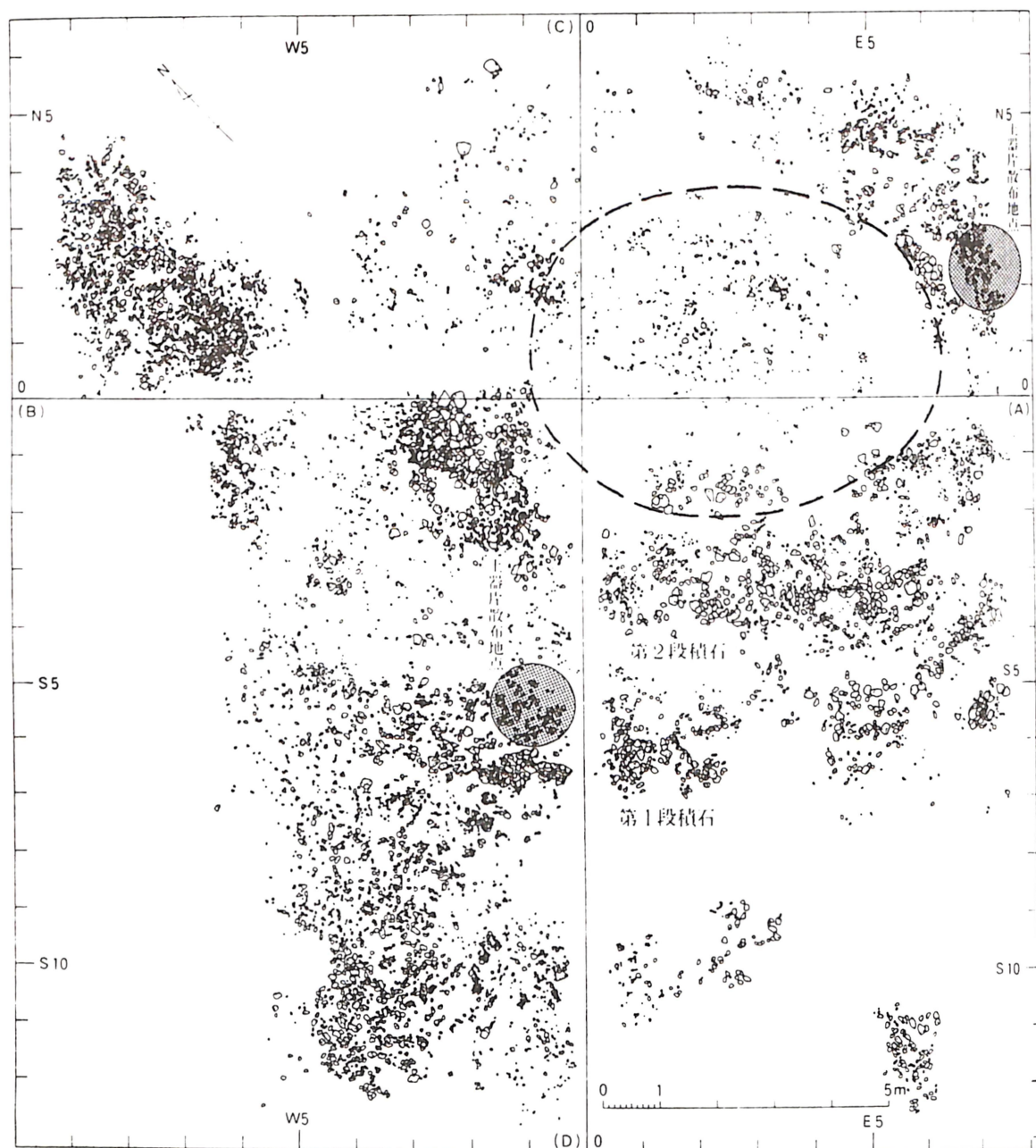
遺物出土状況

墳丘の東裾部（2区）から土器の細片が約一〇〇点、積石の間に破壊されたような状態で出土した。また墳丘の西南中腹部（4区）の積石の間から土器片が出土した。これらはいずれも散布状態であつたが、場所は限定されていたので恐らく原位置と考えてもよいだろう。

出土遺物各説

土器 土師器片

三 内部構造



第 13 图 38 号墳墳丘積石状況図

埋葬施設の形態・規模・構造（第13図）

墳丘の表土を除去すると、礫の積石が、三重に墳丘を取り巻く様な配置であった。そのうち、とくに墳頂部のものは、積石の幅約二・二米で現状では東西約四・五米、南北約三米に積み上げ、その内側は播鉢状に約一米低くなっていた。この積石は、明らかに盛土の上部で造られているので、一応これを埋葬施設であると考えたのである。勿論、この底部において土壇の有無、棺の痕跡等の存在を精査したが、確定できなかった。しかし、形態からいって一種の墓壇とみるか、礫槨とみるかは意見の別れるところであろうが、ここでは検出状況から広義の意味で礫槨として認めたい。

第四章 原 目 山 三 九 号 墳

三九号墳はこの丘陵の末端部に位置し、その東端は急斜面をなして谷に臨む位置にある（第4図）。

一 調査の経過

調査の経過は日誌にもとづいて述べてみる。

昭和四七年

七月一九日 墳丘の軸線を西へ約四五度振る。

七月二〇日 晴れ。プロトン磁力計にて探査。その後、表土剥がしをはじめめる。4区において、一部土層の変

わった部分があった。

七月二二日 表土を全面的に二〇糎掘り下げる。松根が多い。

七月二三日 1区と4区との境にかけては幅約一・五米、長さ約九・五米にわたって赤褐色を呈し、その外側は黄褐色の土層である。

七月二五日 2区の中腹上部の幅約五〇糎に土色の変化した部分があった。

八月 三日 午前に墳丘の撮影を行ない、墳丘のまわりを赤土層まで掘り下げる。

3区の西壁南北線上の暗黄色土層のところに暗赤褐色の切り込み状のものが現われた。これは土壙であるのか、自然堆積層か、または、盛土の過程を示すものであるのか明らかにすることができなかつた。

八月 五日 墳丘の裾部を削つて3区・4区のところで溝状のものを検出した。

八月 七日 実測の準備をする。

昭和四八年

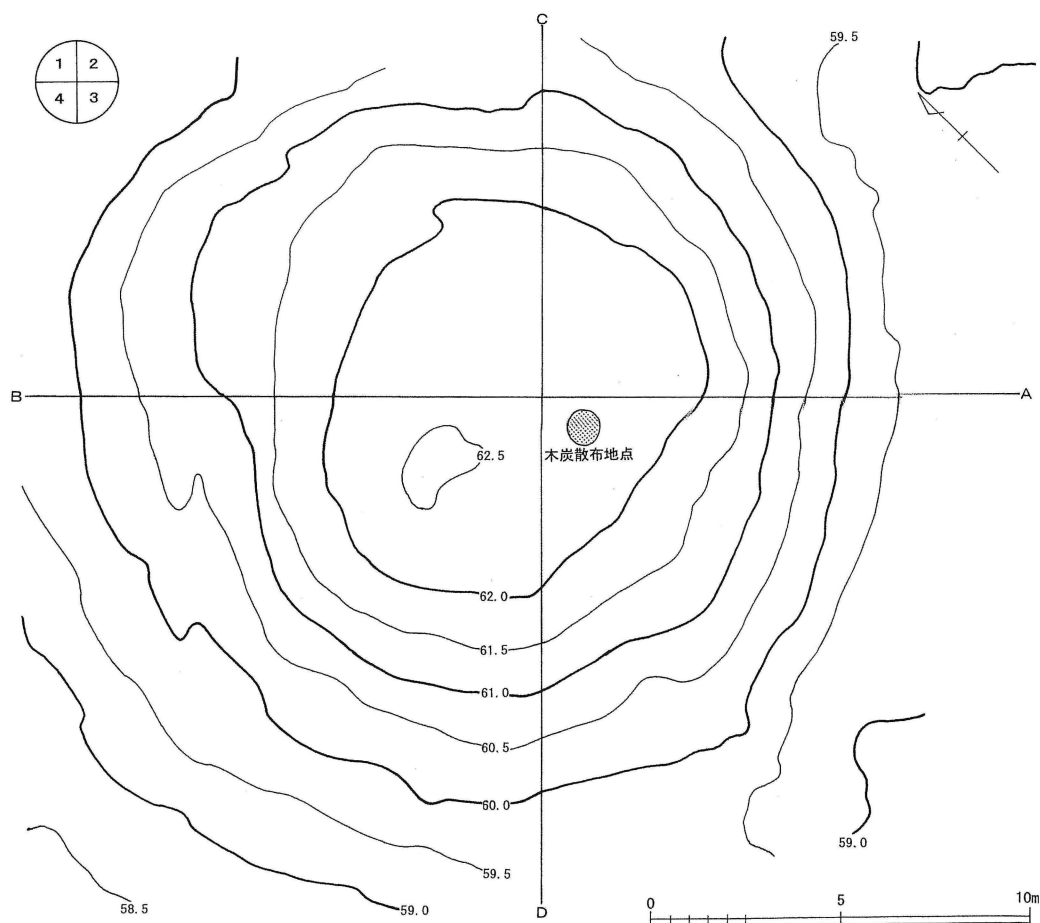
三月一六日 墳丘の割り付けを始める。

三月一七日 昨年掘つたトレンチの土あげと清掃をする。

三月一八日 グリッド壁に沿つて東西線、南北線を掘る。2区西壁では約一八五糎、3区北壁では約一七五糎、4区の東壁北壁では約一二五糎まで掘り下げた。

三月一九日 吹雪のち曇り。いままでの調査の結果、土層に検討を加える。

三月二三日 墳丘の断面図注記と補正完了。



第14図 39号墳墳丘実測図

二 外部構造

墳丘の規模・形態・構造（第14・15図）

三九号墳は、丘陵尾根の末端部、標高約六二・五米の位置にある。

墳丘の規模は、東西約一八・九米、南北約一七・四米ではほぼ円形をなすものである。墳丘内の地山の高さは、西側の基底部より約一・八米、北側の基底部より約一・二米、盛土は厚いところで約一・三米であるが、地山の線は、急激に下降するので盛土の量は東側に特に厚くなる。一方、丘陵の南北を横断面でみると、地山は南から北へ下降するので、北側の盛土も多いのである（第15図）。

第五章 重立山一号墳

一号墳の調査は、昭和四七年度と昭和四八年度の二回にわたって行なった。

一 調査の経過

調査の経過については日誌に基づいて略記しておく。

昭和四七年

七月二一日 晴。表土剥ぎを始める。作業終了を前に1区から円筒埴輪が出土。3区・4区からも円筒埴輪の破片出土。

七月二二日 円筒埴輪列を追って墳形を確かめようと試みた。埴輪列は、中央から東よりにかけて反応がみられた。

七月二三日 プロトン磁力計で土壌の探査をしたところ、墳頂を中心にして約六米平方範囲に反応がみられたので表層下約二〇糎掘り下げたが、土壌の縁辺部は検出されなかった。4区において埴輪二個を検出した。

七月二四日 グリッドの軸線にそって南北にトレンチを掘る。2区の埴輪列の内側から形象埴輪の破片が検出された。円筒埴輪列は円形にならないのでその意味を考える。

七月二五日 2区で東西線に沿った部分を約一米掘り下げる。中心より、西へ約一・二米にて土層が変化する。

土壇の線の部分であろうと推定する。もし、これが正しければ、埋葬施設に埋葬してから約一米の土を盛ったことになる。

4区の内側において円筒埴輪が出土。これによって円筒埴輪が二重に巡っているという考えが出てくる。

七月二六日 2区・4区に南北線に平行して、トレンチを入れる。埋葬施設の探求を続行。

七月二七日 3区の東西トレンチで埴頂部から西へ約一米のところに見れた土層の変化は3区、4区の東西線にみとめられた。

七月二八日 南北線上の墓壇を探すために、1区に南北トレンチ（長さ三・〇米、幅〇・六米、深さ一・二米）を入れる。この南側から内側は赤褐色粘質土、外側は明黄褐色土へと変化することが判明した。これにより一応墓壇の南端を決めることにした。

七月三〇日 形象埴輪片を清掃するに従って、それが家形埴輪片でしかもそれが広い範囲に分布していることが判明。写真撮影を行った。

八月一日 晴。項丘の表土はぎを始める。1区・2区の裾部から、葺石の一部とみられるものが検出された。

八月二日 晴時々雲。埴頂部の写真撮影。その後埴丘の実測を行なう。一方東側の二号墳との境目を掘り上げる。円筒埴輪は実測終了後取り上げ、その痕に目印の杭を打っておくことにした。

八月三日 曇。さきに墓壇内の土と考えられる4区に問題の赤褐色粘質土が現われた。作業終了直前にこの赤褐色粘質土から鉄矛とヒスイ製の勾玉が検出された。これは丁度墓壇そのものを掘り下げたところとなる（追葬部）。

八月 四日 曇時々雨。1区・2区・3区をそれぞれ赤土層まで掘り下げる。1区の赤土層のなかで切り込みを検出。1区の北壁（東西線）下で消え、4区においては、見ることが出来なかった（追葬部）。グリッドの掘残しの壁はいずれも掘り下げるに従って厚くなったので約三〇㎝になるまで削り落す。

八月 五日 晴。2区・3区の側面部及び裾部の黒色土（堆積土）を除去して行くに従って葺石列が顔を現した。この葺石列のところから、円筒埴輪片が多数出土した。この埴輪は墳丘の下段をとりまく葺石の上部に設置されたものではなく墳丘上の埴輪片の転落したものであった。

八月 六日 晴。1区で南北に延びる墓壇の縁辺部を確認したが、北側はまだ、不明である。3区で、墓壇の北西隅の位置を確認することができた。2区のほぼ中央部、墳頂の家形埴輪の破片が散布していた付近で礫の集塊するところがあった。この墳丘には礫などの石類はほとんど含まれていなかった。このため、これは、自然のものではなく人工的な石の集積であった。

八月 七日 追葬部の墓壇の北側の線が観察によってもまだ確認されない。金属探知機を用いて埋葬部の副葬品を探索した結果、南側に鉄刀・剣状のものが存在することが確認された。1区、4区では葺石列は明確ではないが、2区、3区で葺石が遺存していた。

八月 八日 晴。追葬部の墓壇は南側においては明確であるが、北側では充分確認ができなかった。南側から鉄剣、鉄刀、鉄鏃、刀子等が一括して検出された。

八月 九日 晴。八月三日に出土した勾玉類を含む副葬品に対し、昨日出土した鉄製品グループは約二・五米離れているので棺外副葬品であるのか、という疑問が生じた。

八月一〇日 鉄製品グループを清掃すると直刀の隅にあった鉄塊は鉄斧であり、また、砥石があることが判明

した。鉄鏃もそのなかに平根式が一本あった。昨日疑問とした二つのグループの副葬品が同一墓
壙内のものかを調べるために、その間に三本のサブトレンチ、長さ約一米、幅約一五糎、深さ二
五糎のものを設定して調査をした結果、同一墓壙のものであると判明した。

八月一二日 曇。追葬部の墓壙及び副葬品の撮影、実測を行なう。1区、4区の墳丘の裾部の黒色土を二号墳
に向かって掘る。表土下約四〇糎の土層より土師器片が埴輪と混在の状態で検出された。ここに
検出された副葬品をともし墓壙は墳丘の形態からいえば、中心より東側に遍在するものである
ので、更にこの西側にも埋葬施設が存在する可能性が考えられた。一応、この度の調査において
期限が来たので、第二次調査まで墳頂部にシートをかけて、一旦埋めもどすことにした。
八月一三日 埋めもどし完了し、作業は一旦中止した。

昭和四八年

三月 四日 調査再開。昨年に墳丘上を埋め戻して、調査を一旦中止したが、今日から調査を再開する。まず、
埋土の除去から始めた。

三月一四日 雪後晴。ようやく夏に掘った面まで土砂を除去した。その後プロトン磁力計で測定したが、セン
サーに使う水が凍って測定不可能となった。今日まで埋土を除去するのに日数がかかったのは、
冬期であるので作業員がほとんど集まらない状態であったため、やむなく道路公団の作業員に
出動してもらわなければならぬのであった。そのようなことから、労働力を補うために、パワ
ーショベルとブルドーザを墳丘の表土剥ぎに使用することになった。

三月一五日 晴。墳頂部の整掃を行なう。2区の家形埴輪のあった場所の地表下約〇・七米で拳大の礫が集積

したところが現われた。その上にセクションベルトを残していたので、墳丘上から掘り込まれたものであるかどうかを検討したがその様子はなく、墳丘に盛土する前のものであると判明した。

三月一六日 集石の範囲を確認するために西南壁面の除去を始める。3区と4区の境界付近、特に3区の南壁（東西線）に赤褐色粘土質層があり、さらに、4区の南北線よりのトレンチの底部に土層の違いがある。プロトン磁力計の測定結果では決定できなかったが、特に反応を示したところで興味を持たれたところであつた。

三月一七日 4区のトレンチ底部の赤褐色粘質土層からヒスイ製の勾玉一個を検出した。

昨日より問題にしていた赤褐色粘質土層が約一五糎ほどおちこむことが判明。その地点に墓壇があることが推定できた。

三月二七日 1区にて土層の落ち込みが明らかになり、墓壇の範囲がほぼ明らかになってきた。

三月二九日 墓壇は長さが約四・二米、幅約一米の規模のものであることが判った。

三月三〇日 二号墳との境の4区の東西線を掘る。

四月 二日 墓壇が明確になった。副葬品に鏡一面、管玉六個、棗玉一個、扁平玉一個と柄を南に向けた鉄剣一本が検出された。

四月 三日 鉄剣の北側一〇糎のところから漆膜の破片を検出した。

四月 五日 昨夜から早朝にかけて墓壇が破壊されていた。驚きである。主たる遺物は取り上げていたが漆膜面はなくなっていた。

四月 六日 墓壙の平面図完了。2区集石の実測完了。

四月 九日 2区の集石の東半分を掘り下げる。特に変化はなかった。

四月 一三日 墓壙と追葬墓壙との関係を見る。

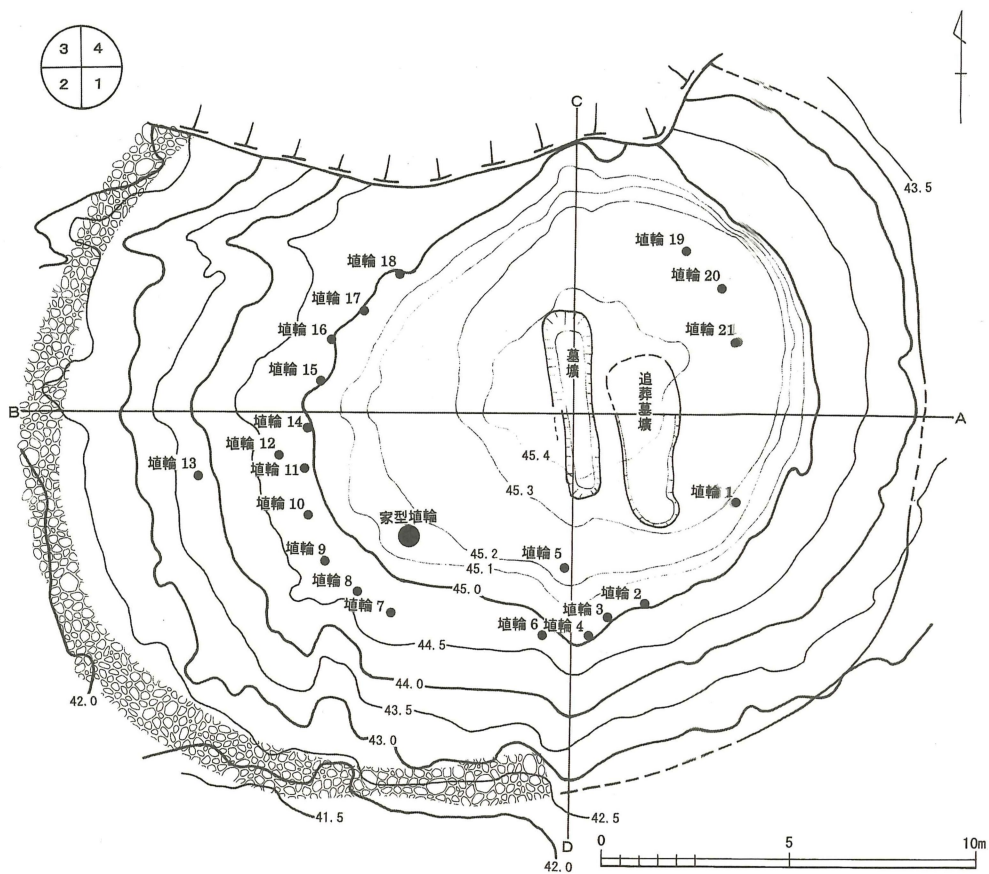
四月 一四日 墓壙より西側をパワーショベルで掘り下げる。旧地表面、黄色土層の上面に炭化物を含む層があった。

二 外部構造

墳丘の規模・形態・構造（第16～18図）

標高五五米から四〇米までの距離にして約七〇米の間に五基の古墳がゆるやかな弧状に存在する。一号墳の墳丘は、丘陵尾根上の末端部近くに築造された円墳である。既に述べたようにこの丘陵の尾根は末端部に近づくにしたがつて尾根が狭小となってくるので、墳丘の径がある一定の規模があれば、尾根の幅との関係上、その位置は自ずと規制される。

一号墳は、この重立山古墳群のうち最大を占めるもので、東西径約二四米、南北径約二〇米、高さ約三・五米の規模のものである。しかし、数値の上から見れば東西径と南北径との差は四米もあつて如何にも楕円形を呈するようであるが、この古墳の立地するのは丘陵の傾斜地であるので、古墳築造に際して一旦平坦面を造つてその上に墳丘を築造しない限り、傾斜地の下部に当る場所は反対の上部に較べて高くなり墳丘が傾斜にそつて長くなるのである。ここでは、東西の高低差は約二米あるので、墳丘の傾斜角からいえば、墳丘築造に際して予定された



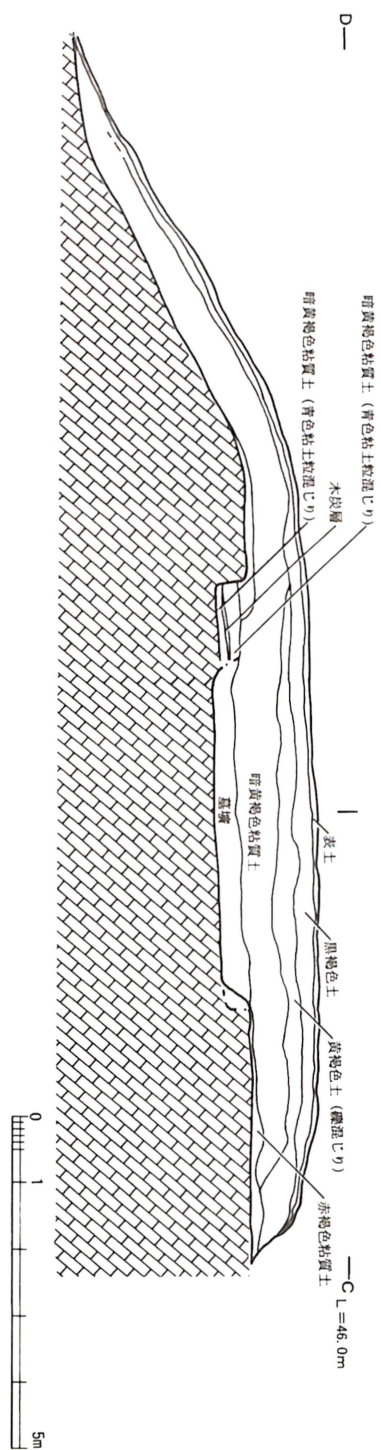
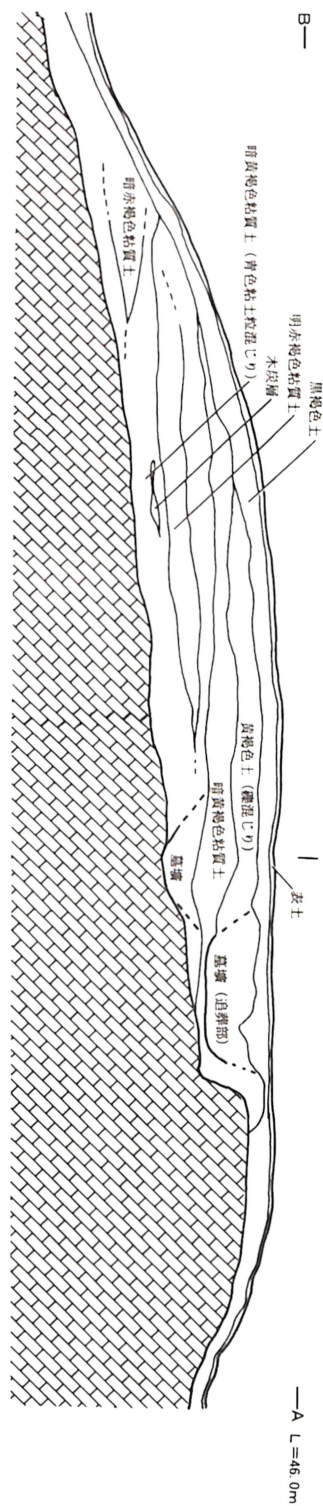
第 16 図 1 号墳丘実測図

のは直径約二〇米の円墳であったと考えられるのである。

葺石（第 16・18 図）

葺石が主として残っていたのは墳丘の西側 2 区・3 区（北半分は流失）の裾部に集中しており、1 区・4 区においてはほとんど認めることは出来なかった。特に、1 区・4 区は東側の二号墳に続く位置で人頭大から拳大の葺石が全て流失したということとは考えられない。墳丘築造の時から葺石はなかったと考えられるのである。

そのようにみると、葺石は、全面的にあったものではなくして、特に調査に際して気付いたところであつたが、西側の斜面で墳丘の南端、東端を画する墳頂部から径約二〇米



第 17 図 I 号墳墳丘断面図



第 18 図 1 号墳葺石検出状況

以下の斜面に沿って敷きつめられたようであった。

葺石がどのように敷かれたかを順次上方から葺石を除去して検討したところ、人頭大の石を墳丘の下底部から五〇糎上方に鉢巻状にめぐらせたことが判明した。これは、葺石を葺く基準の配石であつたと考えられるものである。

ここで特に注意しておきたいのは、この葺石のある 2 区・3 区の前面に幅一米のテラス状の平坦面が存在することである。

埴輪の出土状況（第 16 図）

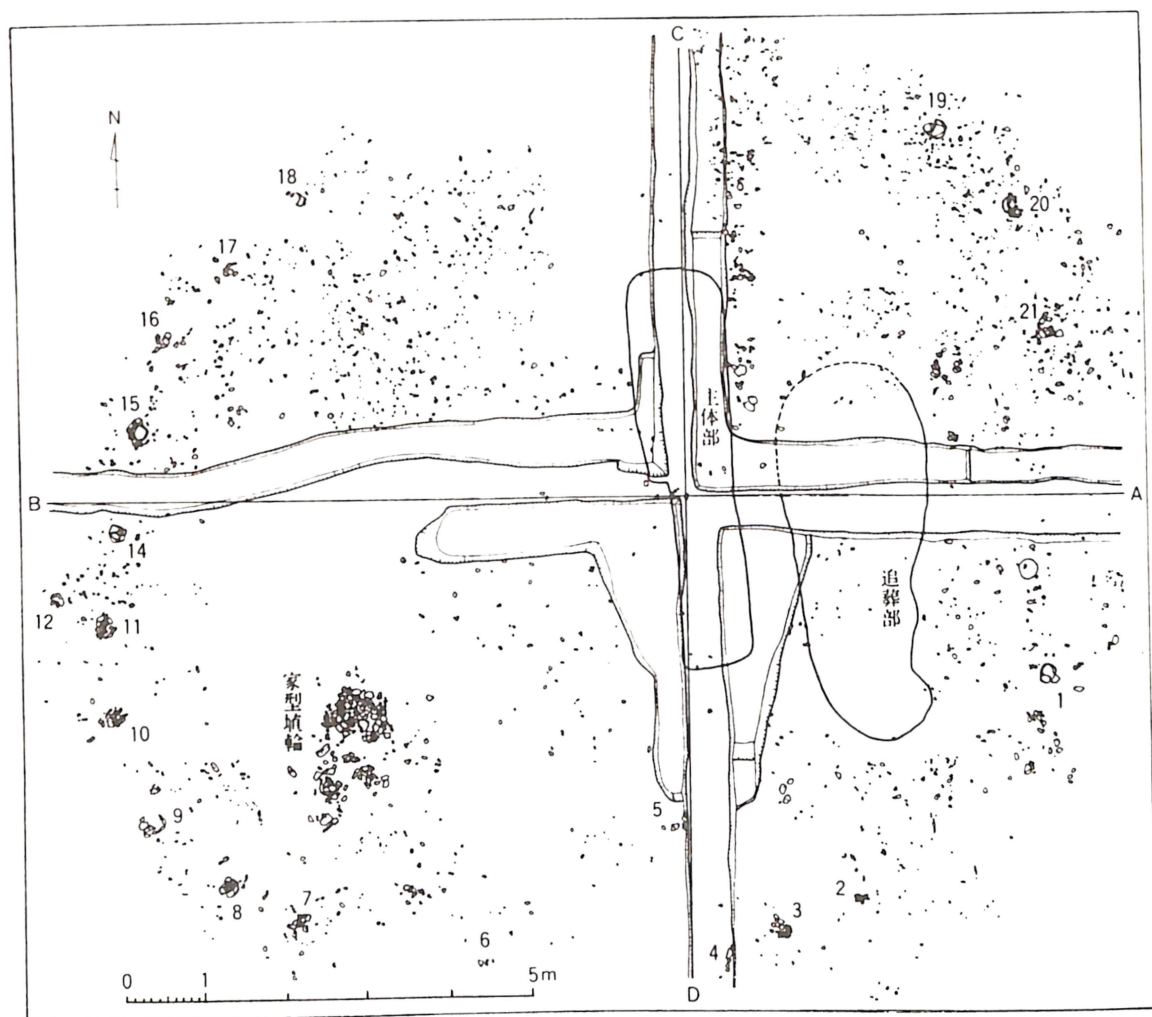
墳頂部の表土下約一〇〜二〇糎の深さから円筒埴輪と家形埴輪を検出した。その出土状態について述べてみよう。

円筒埴輪の配列 まず、はじめに円筒埴輪の説明のため、1 区から 4 区までの各円筒埴輪に番号をつけておく。以下説明は

これに従う（第 16 図）。

円筒埴輪は墳頂を中心にして、円形に巡らせて配列していた。しかし円形といっても東西に長く、特に墳丘の形態と同じく西側に偏っているようである。

墳丘の北側には、埴輪列はない。それは墳丘の部分的な流失のためか、他の理由によるのか不明であるが、ほぼそのラインは推定することができる。すなわち、その推定ラインを加味してみると、円筒埴輪列の描く形は、墳頂を中心にして西に偏った長径約一三米、短径一米の楕円形をなすものであることが明らかになった。



第 19 図 1 号墳埴輪出土状況図

これは、墳丘の形態とよく類似するものである。また、円筒埴輪の基底部のレベルは、2区の埴輪 8・9・10・11は、4区の埴輪 19・20・21に較べて約八〇厘低い位置にある。また、各円筒埴輪の間隔の点からみても、4区の埴輪 19・20・21と2区・3区の埴輪 7・18（埴輪 12・13を除く）をみると、前者において約一・五米、後者は約一・二米で粗密がある。

これらからみて、円筒埴輪の配列は、墳丘の形態を考慮に入れたことは勿論のことであろうが、西側では、墳頂の平坦部ではなく、少し傾斜面まで下げて、また、埴輪の間隔を少しずつ縮

めているというのは、墳丘を如何にも西側から見上げるといふ意識が働いてのことだと考えられるのである。

その他に、この円筒埴輪列の内側に単独で並べられたものとして2区のほぼ南北線上に埴輪5がある。

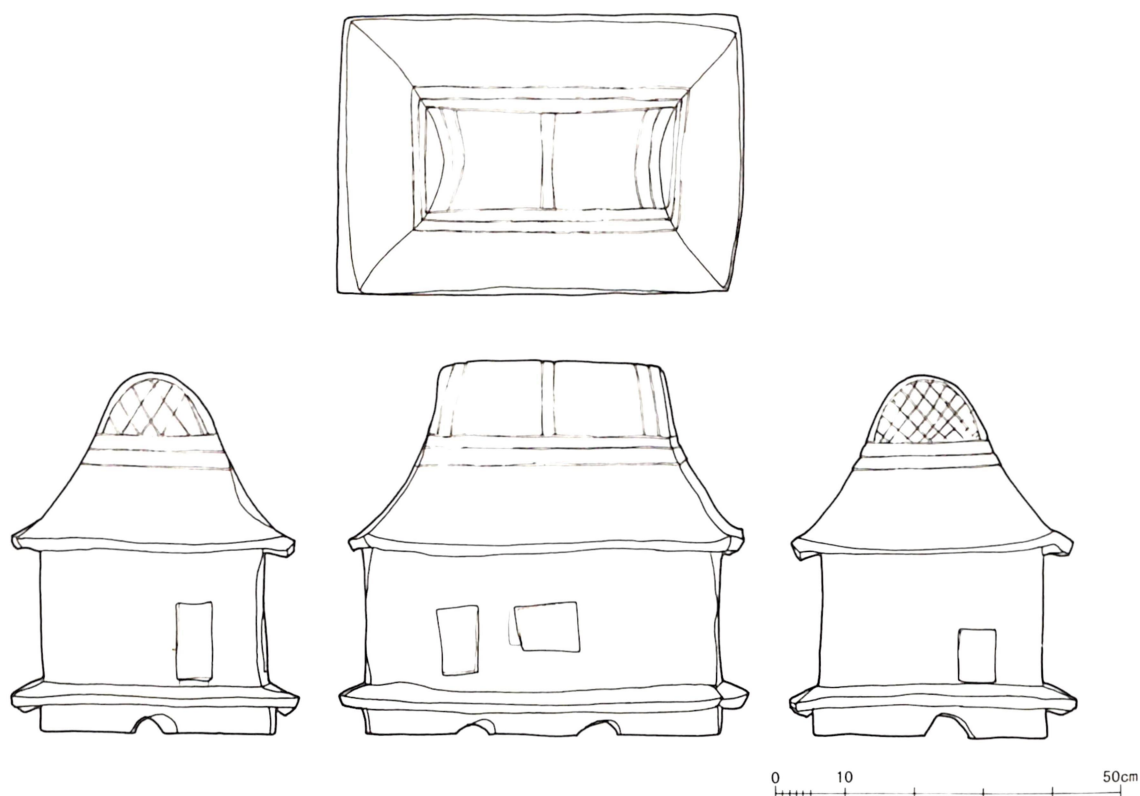
また、円筒埴輪列の外側で検出したものに埴輪12・13がある。埴輪13などは埴輪列から約三米離れており、これは上方からの転落の可能性もあるが、埴輪の底部があり原位置として考えてもよい。

家形埴輪の出土状況 家形埴輪が出土したのは、2区で円筒埴輪列より埴頂に約二米入り込んだところで、一
個体分が破片の状態で出土した。出土状況からみれば、恐らく原位置のままであると見てよいと考えられる。特
に破片の大きさからいえば自然に破壊されたもので、人為的破壊とはみられない。

先にみた円筒埴輪5はこれと同様に円筒埴輪列より埴頂約二米入り込んだところにあつて、ともに特別の意味
を持つものであつたのであろう。

集石遺構

2区から家形埴輪が出土したが、その真下の表上下約二〇糎に、約一八平方メートルの拡がりをもつ集石する平面が
あつた。そこは、丁度家形埴輪の出土した真下に当たつていたので、特別の、例えば祭祀的な遺構であるかもし
れないと、出土品に気をつけたのであつたが、それを証明するものはなかった。また、墳丘内では、ほぼ埋葬施
設と同一平面の場所であつたので、意味があるものと考えられたが、この遺構が墳丘築造後に上部から掘り込ま
れて設えたものではないことは、墳丘断面から充分にいえることであつた。そのことから、この遺構は、墳丘築
造の段階においてつくられたものであると判断した。またこの集石遺構は、単に石を上面に一段並べたようなも
ので、明確な形態・構造をもつものとは思えるものではなかった。これは一体何であるか、将来に残された問題
である。



第 20 図 1 号墳出土家型埴輪

出土遺物各説

家形埴輪 家形埴輪は先に述べたように墳丘上において集塊して出土したので、恐らく原位置であったことは当然考えられたのであるが、復原の結果、ほぼ一個体分であったのである。

この埴輪からみれば、寄棟造りで二間×三間の規模であろう。これは実物ではその倍数になるかもしれないが、当時の居宅を模したものとみられる。屋根は鋳葺である。

ところで、この家屋の入口すなわち、家の正面が平入りであるのか、妻入りであるのかのどちらであったという問題である。

まず、平入りからみてみよう。

この家屋は壁面が四面にあり、四面体とも入口風の透かしが入っている。例えば「平」の両側をみると、一方は入口風のもの、明らかに窓とわかるものを持つ面と、その反対は、窓と同じ高さの透かしがある。これは恐らく窓であろう。この

場合、現代的な考えかも知れないが、前者の方が、南側に面していたと考えられる。ここでこれを南側とみたと、さらに、「妻」の東西壁ともに入口と推定できる透かしがある。大きな面からいつて西側が東側より大きいのである。すなわちこの家屋の入口は、平入なら南側、妻入りなら西側ということになる。

さて、ここで注意しておきたいのは、この埴輪が土の中に入っていたと考えられるのは最下底の半円形の透かしのある一段であるが、その上の横位突出帯は、円筒埴輪における、タガ状のものと考えられており、あまり注意されないが、これはねずみ返しとして見るべきである（第20図）。

円筒埴輪 円筒埴輪は、墳丘上に二一個めぐっていた。その原位置をよくとどめていたが、なかには破損、転落、流失していたものがあり、また、恐らく追葬の時に除去されたものもあると考えられる。この二一個はそれでも残ったものである。

その円筒埴輪の個々の形態については、図版五一―11を除いた外は、その底部しか判らないが、円筒埴輪以外に恐らくいわゆる朝顔型埴輪もあったことは、図版五三にみられるように、壺の口縁部を表すような大きく外反する口縁部、また図版五四の壺の頸部を思わせる部分等があったことによっても判る。

器面の刷毛目は、荒いもの、細かいものとの二種類に大別することができ、荒いものが多いようである。

また、底部には図版五〇―7や、図版五一―13にみられるように、斜め方向に走る植物の茎の圧痕がみられ、製作工程の一端を知る興味深いものであった。

三 内部構造

一号墳の内部構造は、一次埋葬と二次埋葬の二基の墓壙が認められた。

昭和四七年夏期の調査の際に検出した墓壙は、墳丘内の位置からみれば東側に偏在するので一次埋葬とすることは出来ない。いわゆる追葬であろうかという疑問を持ったのであったが、昭和四八年春期調査に際して、墳丘のほぼ中央部から規模の大きい墓壙を検出したのでそれを一次埋葬とし、東側に偏るものを二次埋葬施設としたのである。以下それによって記載する。

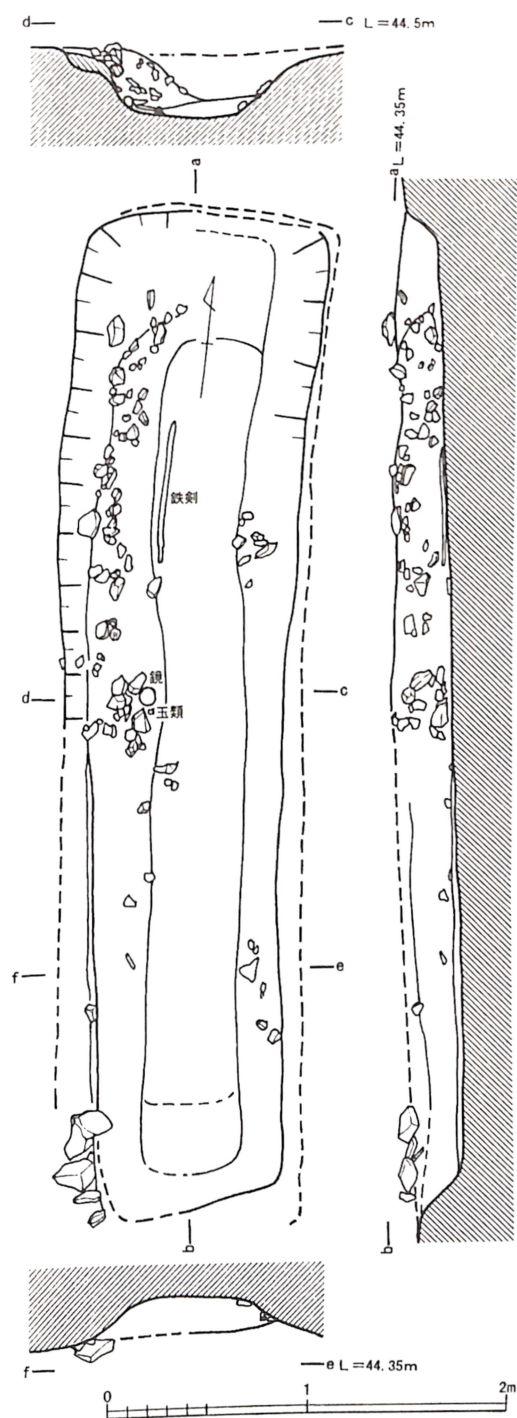
また、2区の家形埴輪出土地点の直下約一・五米のところに集石遺構があった。これなどは外部構造に属するものであるのか不明であるが、とにかく、表土下約一・五米であるので一応ここで取り扱うことにした。

一次埋葬施設の形態・規模・構造（第21図）

埋葬施設は墳丘のほぼ中央（これは先に述べた如く、西側裾部の拡大部を除いた範囲）に位置し、磁北に対して西へ約五度偏った方向にある。

墓壙 この一次埋葬の墓壙は、墳丘の断面によっても知られるように、調査に際して、墓壙の真上にグリッドの原点を設定し、それぞれのグリッドの壁面に墓壙の掘り方の縁辺部を特に念入りに調査したのであったが、それらしきものはまったくなく、グリッド底面において、埋葬施設と接したのであった。このことから、一号墳においては墳丘を一旦盛り上げて墓壙を掘って棺を納めるというのではなく、ただ木棺を納める壙を掘っただけであった。

しかし、これも厳密に言えば墓壙ということになる。規模は長軸約四・九米、幅約一・二米、深さ約三〇㎝の土壙で、上縁はわずかに斜上するが、それもまったく木棺を納めるべきぎりぎりのものであった。

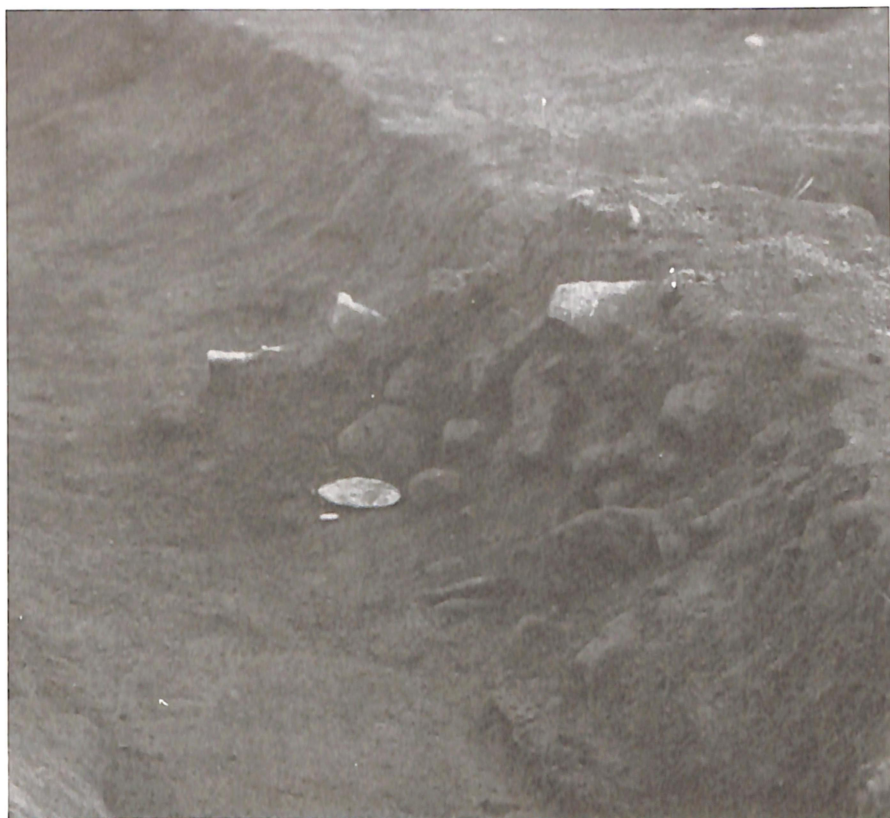


第21図 1号墳一次埋葬施設副葬品配置図

木棺の規模と形態 先に述べた墓壇の底面に木棺を設置したものであるが、ここでは木棺を設置する際には、粘土或いは特別の土を用いずに、墓壇を掘るために底部を凹めた程度のものであつて、棺床というべき特別の施設はなかつた。棺の北西部においては、石が並んだ状態で塊まっていたのでこれは恐らく棺を置くとき安定を計るために用いられたとみられるのである。

このようなことから木棺の縁辺部はあまり明確ではないが、形態から割竹型の狭長なものであると判断した。全長約四・一米、北側の幅約〇・五米、深さ約一〇糎、南側の幅約〇・五米、深さ一〇糎で北側の方が幅が広いので恐らく北側に頭部を向けていたものと判断される。なお木棺の木口部は南端において明確であつたが北端ではあまりはつきりしなかつた。

副葬品出土状況（第21・22図）



第22図 1号墳一次埋葬施設鏡・玉類出土状況

副葬品は棺内の北半分、しかも、西側に偏って検出した。

鉄剣は、剣先を北に、柄を南にし、棺と平行して棺の西側にあった。この剣先から北一〇糎行ったところに器種不明であるが、漆の膜面状の小破片のものがあつた。さらにこの剣から南側約六〇糎のところに鏡面を上に向けた乳文鏡があり、その鏡を取りまくような状態で管玉七個、鏡の東側に勾玉一個と扁平玉一個が検出された。

副葬品各説（第23・24・25図）

鉄製品

剣 全長約七〇糎、刃部長約六〇糎、茎部長

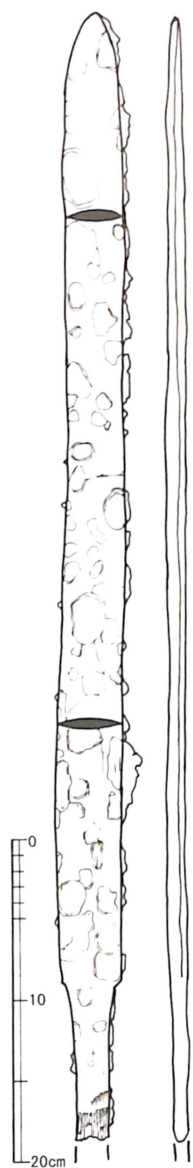
約一〇糎、幅約四糎の比較的保存のよい

ものである。茎

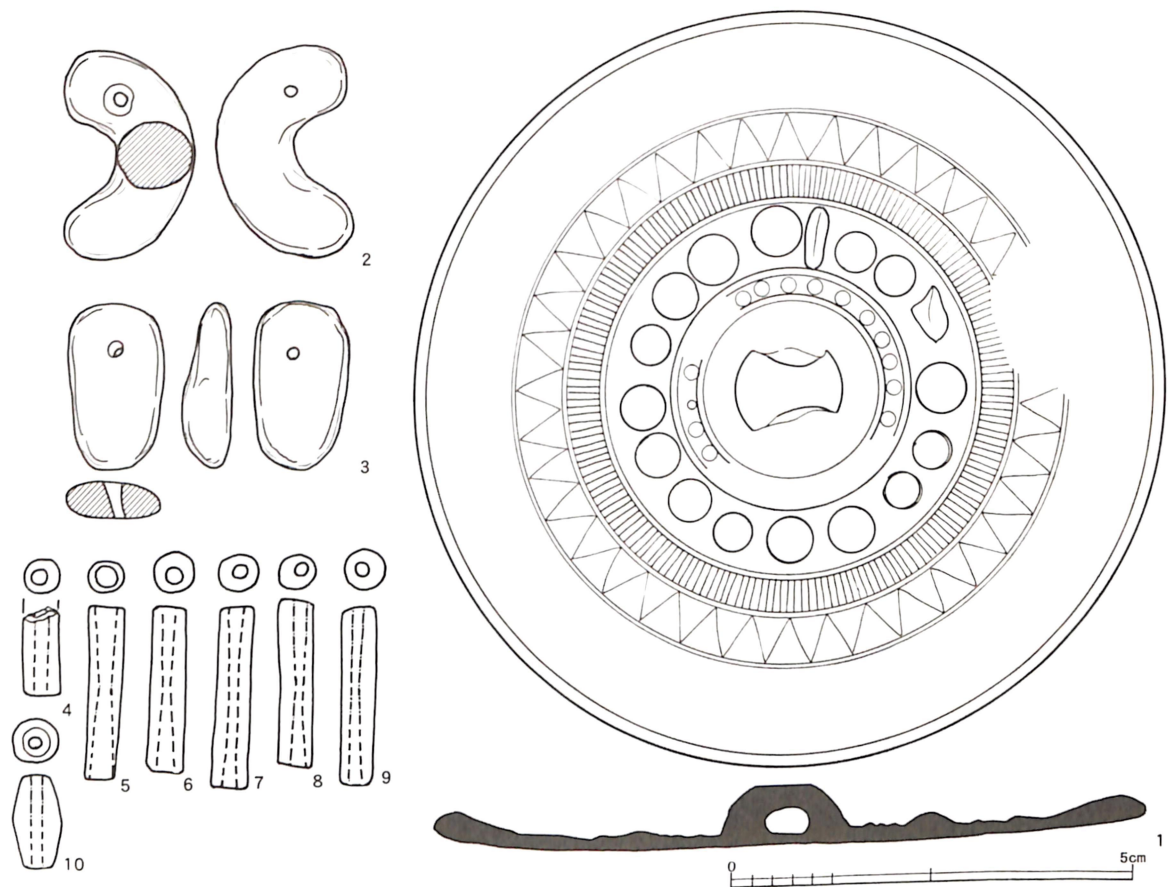
部末端が僅かに

欠けている（第

23図）。



第23図
1号墳一次埋葬施設出土剣実測図



第24図 1号墳一次埋葬施設出土副葬品実測図

鑑鏡

乳文鏡

直径約八・七厘の仿製鏡である。鏡背の一部の文様が不明であるが、半球形の紐の座に珠文をめぐらせ、内区に一六の乳を配している。内区の外周には櫛歯文、外向鋸歯文をめぐらして素文の外区に至る（第24図1）。

玉製品

勾玉

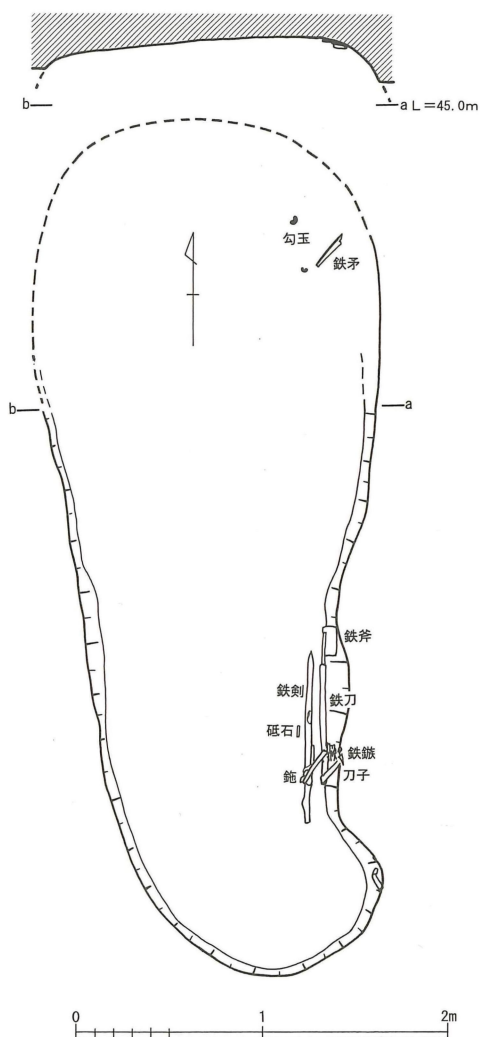
全長約二・六厘、断面は丸く孔がX線写真で見られるように片側から穿孔されている（第24図2）。

扁平玉

全長約二厘の小判形をしたもので、一方に穿孔がある（第24図3）。

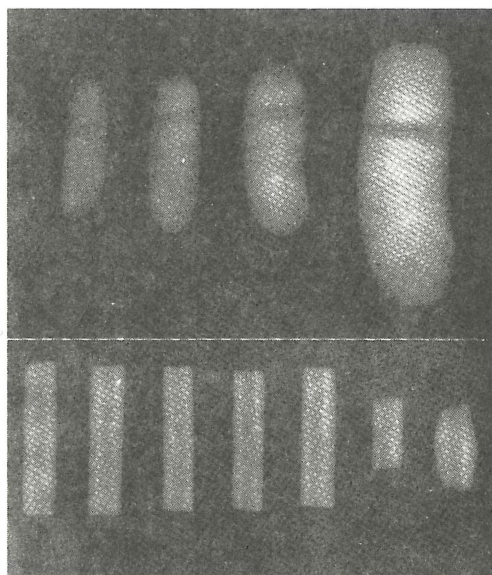
管玉

管玉の出土数は六個であるが、そのうち五個が長さ二・三厘、径約〇・五〇・四厘であるが、他の一個はその半分の長さ約一・〇厘、径約〇・



第26図 1号墳二次埋葬施設副葬品配置図

墓壇 二次埋葬の墓壇は一次埋葬施設の東側約〇・八米の位置にあつて、その南端は一次埋葬施設の南端よりは一・〇米南側より始まり、一時埋葬施設とほぼ平行の位置にある。この二次埋葬の墓壇の南端は、円味を帯びた不



第25図 1号墳出土玉類X線写真

棗玉

三五糎である。X線写真によれば、その六個とも両側から穿孔されている(第24図4〜9)。

長さ約一・二糎、両端の径が約〇・三糎、そのほぼ中央の最も太いところが約〇・六糎である(第24図10)。

その他 漆の膜面の小片が器種不明であつたが数片出土した。

二次埋葬施設の形態・規模・構造(第26図)

二次埋葬施設は、一号墳において最初に検出した埋葬施設で、墓壇の存在が一次埋葬施設に比してはやくから判明していた。

定形をしているが、その北端部は不明確でその形態は明らかでない。しかし、現状で判っている長さは、約四・五米で推定長は約五・〇米であろうと考えられる。幅は南側で約一・〇米、北側では約二・〇米を測ることがができる（第26図）。

木棺の規模と形態　木棺は、墓壙が浅く、南北に長い不定形のものでそのなかに納められたと考えられるが、木棺状のようなものは検出されなかった。調査時にこの点を特に留意したのであるが、これを確認することが出来なかった。

副葬品出土状況

この二次埋葬の墓壙からの副葬品は、北側に勾玉二、鉄矛一の北群と、鉄剣一、鉄刀一、鉄鏃二〇以上、刀子一、斧一、鉞一、砥石一の南群との二群にわかれていた。

このように南北両群にはつきり分かれているので別個の埋葬遺構があるのかと思つたが、先に述べたごとく同一墓壙内とみても、互いに重複するものがないので、同一埋葬遺構に伴うべきものであると判断できたのである。また、北群の構成は矛と勾玉からなっているので、勾玉の性格上、これは埋葬遺体の頭部の近くにありたと考えて誤りがなければ、この遺体は北側に頭部を向けていたと考えられる。南群は武器、工具類で恐らく



第27図 1号墳二次埋葬施設出土剣実測図

足もとに副葬されたものとみられるのである。

副葬品各説

鉄製品

刀 全長約七七糎、刃部約六〇・五糎、刃部幅約三糎、茎部長さ約一六糎、茎部幅約二・五糎の直刀で、

茎部は僅かに内湾する。目釘穴は一穴である（第27図1）。

剣 茎部の保存状態は良好でなく、錆が著しい。その形状は扁平というより、むしろ丸みを帯びたものにな

っている。X線写真によってかろうじて目釘穴のあることが判る。全長約八八糎、刃部長約七一糎、

刃部幅約三・五糎、茎部長約一七糎、茎部幅約二・五糎である（第27図2）。

矛 矛の鋒先は出土時から欠失していたので全長は判らないが、残存長が十七・六糎で、長さ約一一糎の

中空の袋部がついた形状である。穂部の断面は菱形で鎬を持つもので、刃部の下端と袋部との間はそ

のま直線的につながるものである。袋部の縁辺径約三糎に相対する位置に一辺二糎の二等辺三角形の

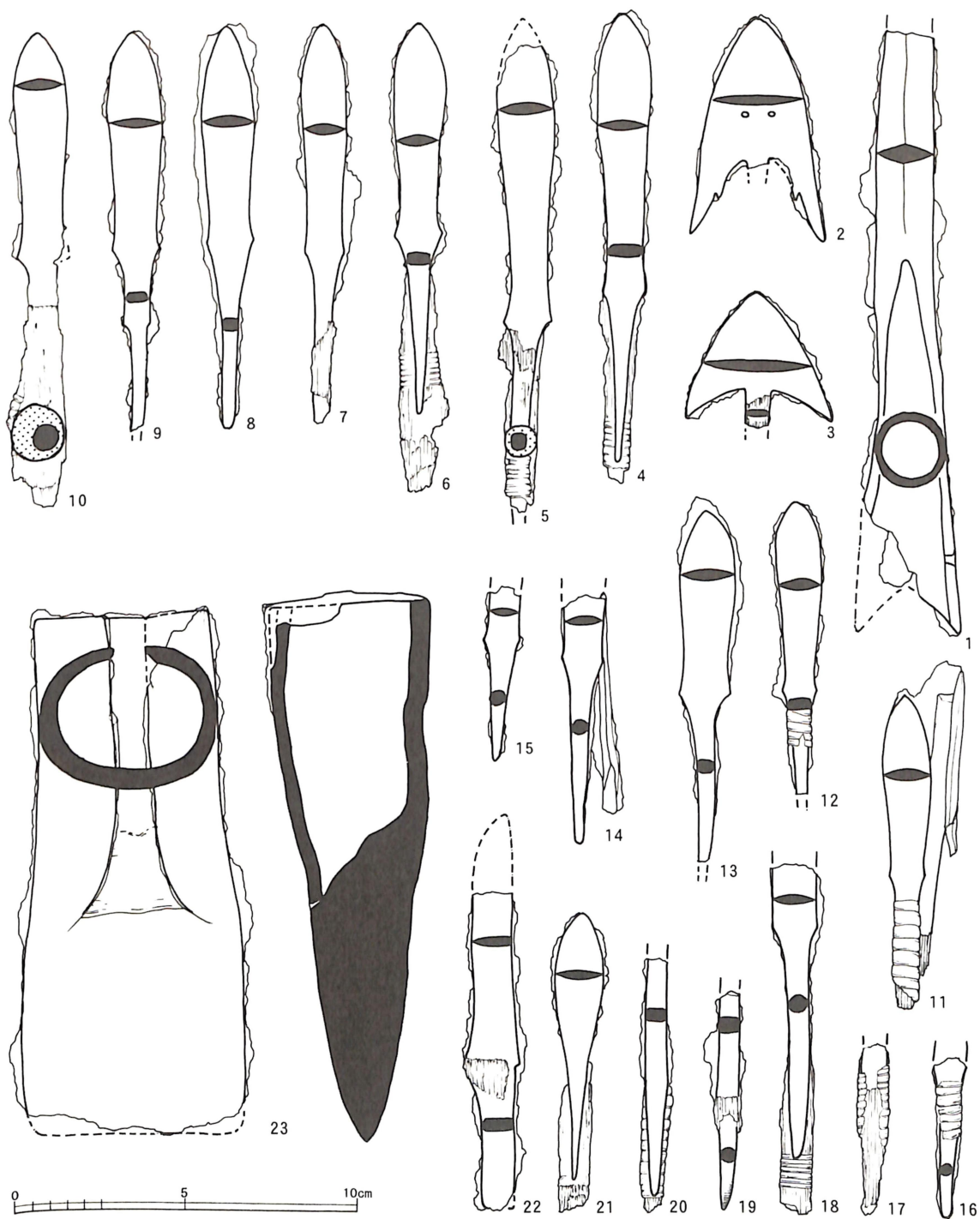
割り入みがあり、推定長は約二四糎であろう（第28図1）。

鏃 は、南群のなかに二〇本以上が一束になった状態で出土した。形状からは、平根式と有茎柳葉式に

分けられる（第28図2）。

平根式（1）は長さ約七糎、脚状の長い逆刺があつてその内側に、左右対称の位置に小さい逆刺がある形状である。茎部の先端は欠失しているが、短いものであろう。鏃身は約三糎の厚みで、二個の孔がみられる。これは矢柄を両面からはさんで、緊縛したものと考えられる（第28図3）。

平根式（2）は全体の形態は、一辺が約四・五糎の正三角形の一辺に茎部と浅い逆刺を造り出すため



第28図 1号墳二次埋葬施設出土副葬品実測図

に割りを入れたような形状である。鏃身の厚みは約三糎、短い茎に、矢柄の鏝着のあとが認められる（第28図3）。

有茎柳葉式は大別して二種に分けられる。いずれも、この有茎柳葉型鏃の茎部に、矢柄がさし込まれた状態で鏝化したものが多く鏃がいかにも矢柄に装着していたかを知ることが出来る。すなわち、茎部を矢柄にさし込んでその上に樹皮を巻き付け漆で固着させていた。実測図の矢柄の透視図はX線写真にもとづいたものである。

有茎柳葉式Ⅰ型 この形式のものは、鏃身が先端部からゆるやかな曲線でふくらみ、中央部で細くなり関で両側に軽い割りを持つ突起をもつものである。さらにこれらは法量のちがいから三種にわけることができる（第28図4～13）。

イ・全長約一三・五糎、茎長約五・二糎。

ロ・全長約一一・八糎、茎長約五・四糎。

ハ・全長約九糎、茎長三・二糎？

有茎柳葉式Ⅱ型 形態は杏仁型をなすもので、全長約八糎、茎部三糎、鏃身部の中央のふくらみから茎に向かって細くなるものである（第28図21）。

切先が欠失して全長は不明であるが、推定長約一二糎、幅約一二糎、厚さ約三糎、茎部長約四五糎である。刀身の背の刃部から茎部に移行するところに関がある。なお、刃部の茎に近い部分はいくぼんでいるが、これは使用のためか不明である。茎部に木質がわずかに鏝着している（第28図22）。

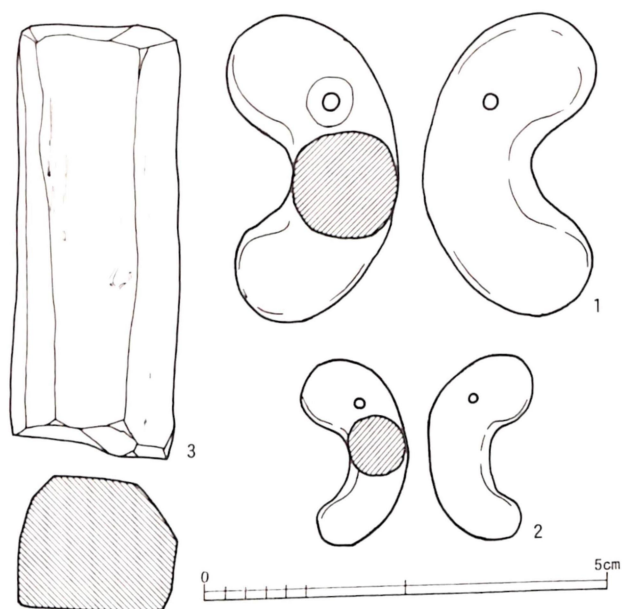
刃部と袋部からなっている。袋部は刃部にくらべて、薄く造って中空の円筒状になる様に、中央でそ

刀子

斧

石製品

砥石 全長約五・五糎の目の細かい手持砥石である。研磨をみると条痕はほとんどみられず、なめらかである（第30図3）。



第30図 1号墳二次埋葬施設出土玉類実測図

玉製品

勾玉

二個出土した。一つはヒスイ製で全長約三・八糎、もう一つは、全長約二・三糎のものでともに頭部に一方からの穿孔がみられる（第30図1・2）。

鉞

（第28図23）。

全長約二五糎、幅約一糎、厚さ四糎で、そのほぼ中央部でわずかに曲がっているが、側面からみれば鋒先は大きく円弧を描くように反っている。その一方は、端から約三・五糎のところ、わずかに折れ反っている。こちらの方が厚みを増すので柄と考えたのである（第29図）。



第29図 1号墳二次埋葬施設出土鉞実測図

の両端部を合せているものである。全長は約一五・五糎、刃部の幅約六・五糎、袋部の径約五・五糎である

第六章 重立山二号墳

二号墳は、一号墳の東側に接して築造された古墳である。

いま、調査日誌をもとにして、調査経過を述べる。

一 調査の経過

昭和四八年

三月 七日 曇。昨年に設定した基準点が若干違っており、再度設定した。道路公団が設定した二三一ポイント（海拔約四七・〇九一米）がこの二号墳の2区にあるのでこれを基準とした。

三月一三日 曇、雨、アラレ。2区・3区の表土はぎを始める。埴輪の破片出土。

四月 六日 二号墳の東、三号墳との境を掘り下げる。堆積土が相当深いことが判明した。

四月 七日 3区・4区の表土下約六五糎で厚さ約五糎の焼土らしいものがあり、その直上から鉄剣が出土。

その北側の同一面から鉄矛と鉄斧が検出された。鉄剣は2区北壁下で壁に直立して出てきたので、特に壁面をよく観察したが土壌らしきものがなく、棺上に盛土して墳丘としたことが明らかになつた。

四月 十一日 盛土と含炭土層を切り込んだ墓壙が1区、4区にわたって検出された。

四月 二十一日 墓壙の大きさは、南北方向の長方形で長さ約三・四米、幅約二・三米のものであることが判明し、

墓壇内南半分を掘り下げる。

四月二三日 墓壇底部から鉄剣二本を検出。北側において石組が出る。恐らく木棺の端を押えるか囲ったものであろうと判断した。

四月二九日 二次埋葬の墓壇南端外から棺外遺物と考えられる鉄鏃、鉄鎌、鉄斧等が出土した。

四月三〇日 快晴。調査終了。

二 外部構造

墳丘の形態・規模・構造（第31・32図）

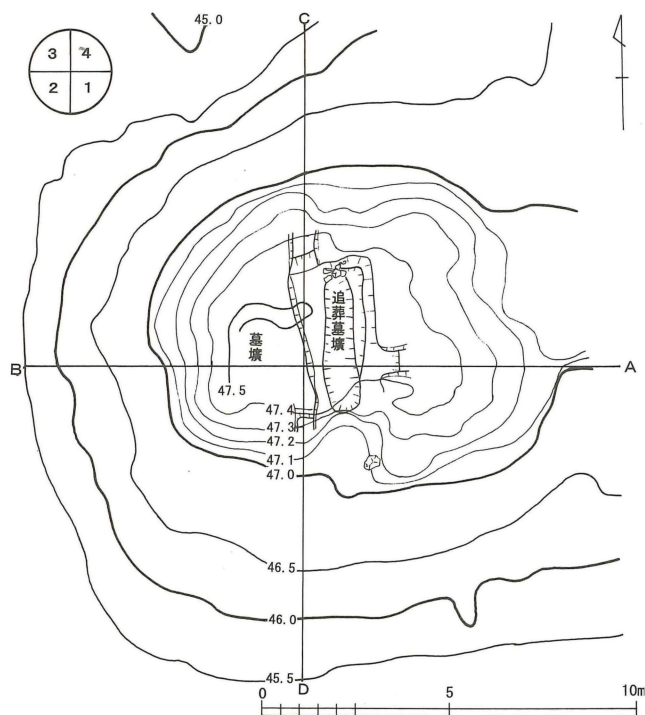
二号墳は一号墳の東側に隣接して営まれている。ちなみに墳頂部を基準として距離を測れば1号墳と約二三米の距離である。

この重立山の丘陵基盤の傾斜を地図上で測定してみると、斜面約七〇米に対して高さは約一〇米であって、丘陵の尾根としては一応なだらかなものである。古墳群はこの上に造られているのである。

一号墳と二号墳とがどちらが先に造られたかということは、切合関係がある場合には、決定することが出来るけれども、そうで無い場合は困難である。

一号墳の東側と二号墳の西側は、両者ともその相対する斜面が地山を掘削して整形しており、その面について盛土の形跡がないのである。

墳丘実測図（第16図）をみても判るように一号墳は美しい楕円形を呈しているが、二号墳については、一号墳



第31図 2号墳墳丘実測図

に面する西斜面が直線的に丘陵を横断する方向をとっている。

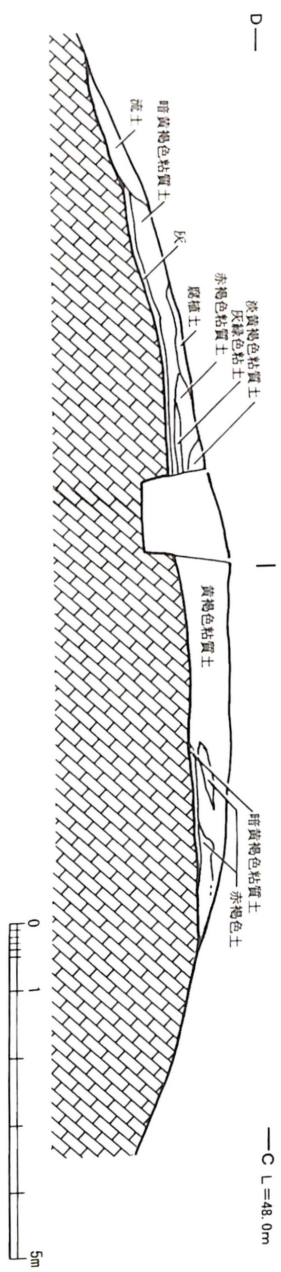
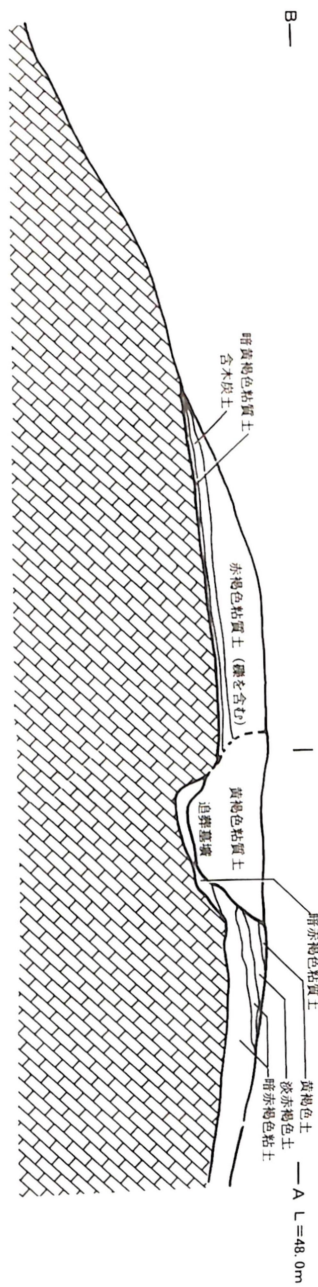
ところが、一号墳の裾部は円形を描いて丘陵を切断しているのである。ここで問題にしたいのは、若し一号墳の造営が早い場合、東側の裾部を円形にまとめるにしても、それより東側の地山の掘削をどうしたかという問題がある。つまり、裾底部まで掘削したときに、墳丘の東側にある程度の傾斜をもつて削ったか、そうでなかったかである。

もし環境の整備の上から東側の斜面を掘削したとしたらどのような形になるだろうか。何故この問題にこだわるかというと、二号墳だけを地形的に見ると、一号墳と接するところは、先に述べたように直線的で、しかも南西側に方墳を表わす稜線がある。

古墳築造者は盛土の部分だけを墳丘とせず西側の裾部まで含めて考えたのであろう。とすると、二号墳の形態は南北約二三米、東西約二〇米の方形となるのである。

いま述べたように墳丘の西側は、全面地山を削り出して形態をととのえ、墳丘の中心となるところに盛土、整形しているのである。

埴輪出土状況



第32图 2号墳填丘断面图

墳丘上面の土砂がどれだけ流失しているかを現状では知ることが出来ない。この墳丘上に埴輪が巡らされていた痕跡は認められなかったが、一号墳や四号墳の状況から見れば墳丘上の全埴輪が流失することはなかったと考えられる。このように見ると墳丘上に埴輪は巡らされていなかったが、三区の裾部から二六片の円筒埴輪片を検出した。この三区は一号墳との反対側にあつて、そこからの流入は考えられないので、いくらかは使われたとみてよいだろう。

三 内部構造

二号墳は調査の結果、二基の埋葬施設を検出した。種々検討の結果、先に埋葬したと考えられるものを一次埋葬施設、後に追葬されたものを二次埋葬施設として、記載もそれに従った。

一次埋葬施設の形態・規模・構造（第33図）

埋葬施設といえば明確で、その墳丘内に誰がみても明らかな埋葬形式をとるものであるが、ここでは少し事情が違ふようである。

墳丘の中央から西側で鉄斧一個と鉄矛一本とを組合せたものと、それから約七〇糎南側でほぼ直線上につながる位置に鉄剣が一本出土した。

調査は勿論、墳丘の表土を剥ぎ、墓壙を探することを目的の一つにしていたが、前触れもなく、突然出土したのである。しかし、幸いなことに鉄剣が区劃壁に沿つて現われたのである。その鉄剣を挟んでいる壁面を長時間にわたつて検討した結果、鉄剣は盛土のなかから出土しており、その周辺部に全く墓壙らしきものが存在しないこ

とが明らかになった。さらに、この鉄剣は、地山直上にある含木炭土層の上面に載った状態であった。

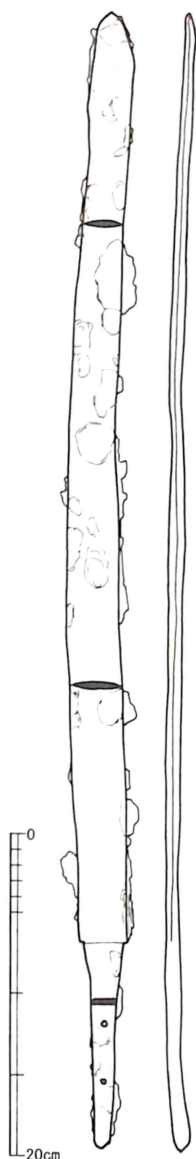
この含木炭土層は、古墳の築造に先立って樹木を伐開し、焼却を行なった跡であろう。その含木炭層の直上から、これらの副葬品が出土したのである。このことから、この二号墳の築造の際に棺が埋葬され、その上部を盛土で被い墳形を整えたと考えられるのである。

また、この棺の位置は、墳丘の中央より西側に寄せているのは、あらかじめ東側に次いで埋葬することを想定してのことであったと考えられるのである。

さて、この棺の種類について判断できる資料はないが、副葬品が先に述べたように含木炭層上にあつて極めて平坦なところから検出したのである。このことは、棺の外形構造は不明であつたとしても少なくとも底部は平板的なものであつたと推察できる。その棺の大きさは、副葬品間の距離から見ると、最小限度でみても、その長さは約一・五米のものになるのである。

副葬品出土状況（第33図）

副葬品は、北側で鉄矛一本と鉄斧一個が鉄矛を下にして重ねた状態で出土した。さらにこの位置から南側で鉄剣一本を検出したのである。これ等の副葬品は直線上に並んでいる棺の内に納められるか、棺に添わせていたものと考えられる。



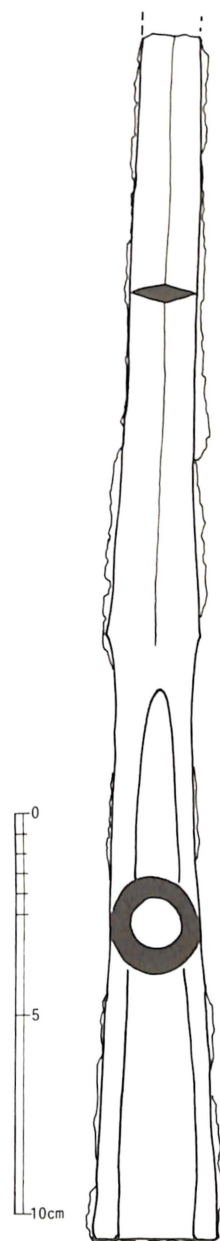
第34図
2号墳一次埋葬施設
出土剣実測図

副葬品各説

鉄製品

剣 全長約七〇糎。

刃部長約五八糎、



第35図
2号墳一次埋葬施設出土矛実測図

幅約四糎、茎部長約一二糎、幅二糎の比較的保存のよいものである（第34図）。

矛鋒先は欠失して全長は不明であるが、残存長が約三〇・五糎、袋部が約一五糎、袋部の縁辺の径約三糎である。

矛身の断面は菱形で縞があり、袋部との関は、その移行部分で割り入っている。袋部は中空になっており、

推定全長は約三一糎であろう（第35図）。

二次埋葬施設の形態・規模・構造（第33図）

二次埋葬施設は、先の一次埋葬施設の東側に主軸を南北方向にとり、墳丘の南北線の中央より東に寄せられた位置にあった。

墓壙 墓壙は、表土の直下から掘られ、墓壙上縁の長さは約四・八五米、幅約二・一〇米、底面の長さ約四米、幅約一・七米、深さ約一・二〇米で上面から、約〇・四米で段をつけた段掘りをしたものである。

なお、墓壙の西辺の北側は、若干外へ掘り込んでいようである。この墓壙の底部はほぼ円形を描いてくぼんでいる。

木棺の形態・規模・構造

棺床 墓壙の底部に主軸に直交して直径約〇・六米の半円を描く棺床がある。これはおそらく、割竹形木棺が埋葬されていたと考えられる。その大きさは、長さ約三・六米、幅約〇・七米のものであり、その棺床の北端に



第36図 2号墳二次埋葬施設墓壇石組

積石があり、北端外側に詰められていた。この積石の下底部は、長さ約六〇糎でその上部に径約三〇糎の石を積み上げ、木棺の北端のおさえとしたのであろう。それがどのような意味を持つのか興味あることである。

なお、棺床の底部の北と南とに鉄剣が二本副葬されていた。

棺外副葬品 追葬部の棺床の南端から約一〇・五米、棺床の床面から約一〇糎下層から鉄鏃、鉄鎌、鉄斧がかたまつて出土した。これは墓壇の南端底部に置かれたものである。

副葬品各説

鉄製品

剣 一本は全長約七〇糎、刃部長約五二糎、幅約三糎、茎部長約二三

糎で、もう一本は全長約四七糎、刃部長約五二糎、幅約三糎、

茎部長約一〇糎である。比較的保存のよいものである(第37図)。

鏃 鏃は平根式鏃が一本、有茎柳葉式鏃が一六本出土した。

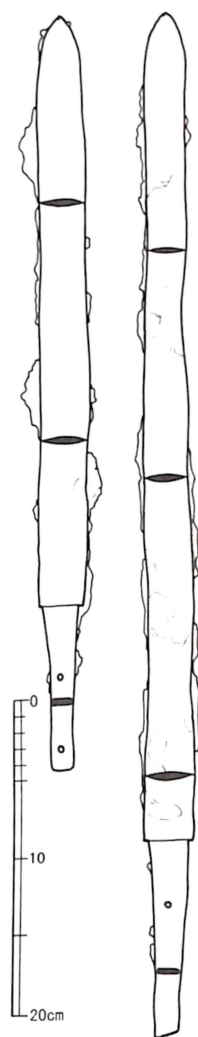
平根式鏃は、一辺が約四糎の三角形をなすもので、短い茎が附

く、逆刺の部分は短いとその内側に、さらに相対する位置に小さ

い逆刺を持っている(第34図1)。

有茎柳葉式鏃は、形態が柳葉式でみなよく類似するが、その大きさから二つに分けることができる。

大きいものは、全長約一三糎、鏃身は約七糎、幅約一・四糎、茎に移る関に繰込みがある(第38図2・7)。



第 37 図
2 号墳二次埋葬施設
出土剣実測図

次に小さいものは全長一
一・二糎、鎌身は約六糎、
幅約一・三糎である（第 38
図 8 ～ 12）。

その他に鎌身は欠失して不明であるが、長い断面が長方形をなす筈被がついて茎になるものがあり、比較的大型のものと考えられる（第 34 図 15 ～ 17）。

鎌

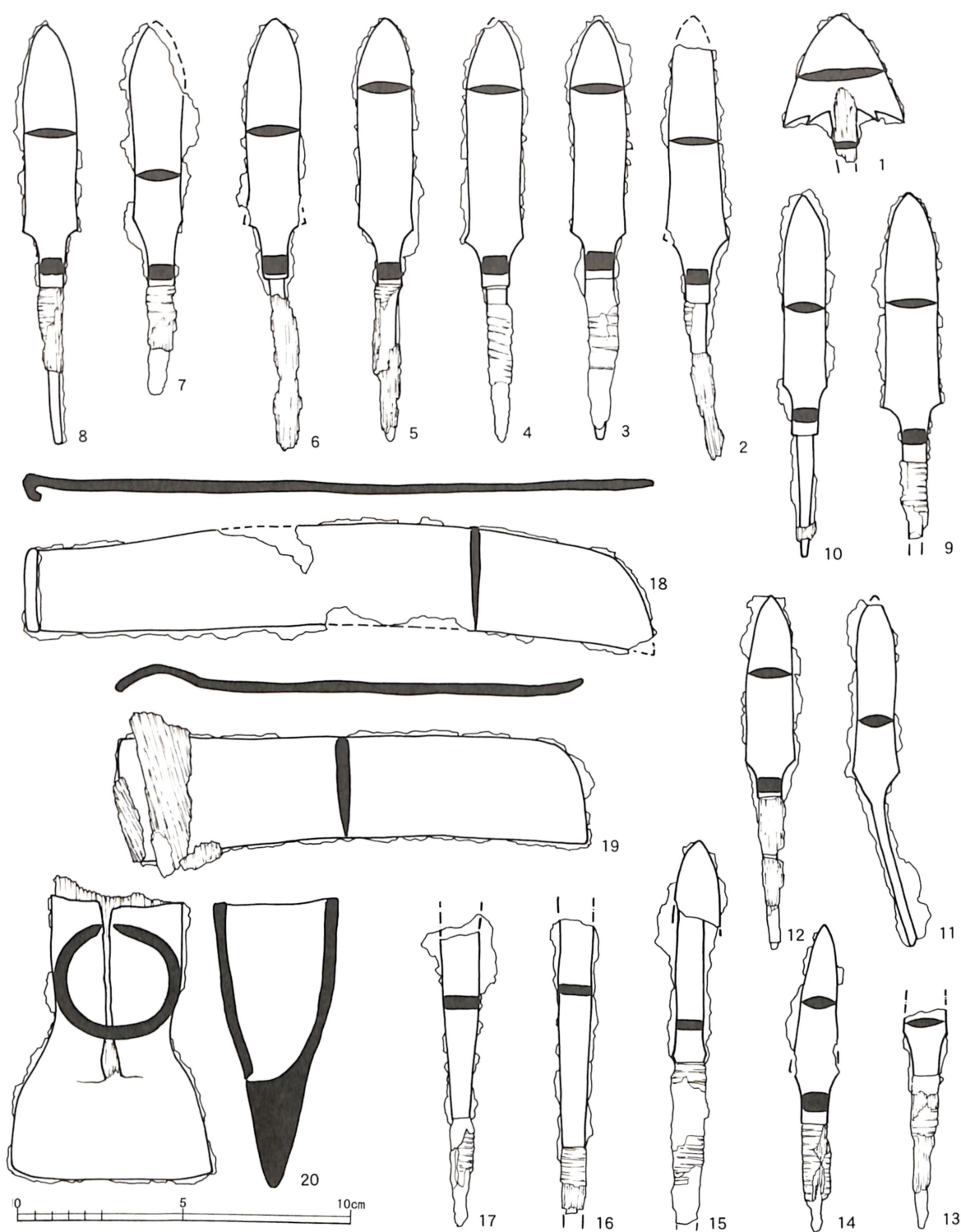
鎌は刃部の長いものと短いもの二本出土している。

刃部の形式は類似するが、基部の柄を装着する部分の折曲げは異にしている。

短い鎌の基部は斜めに大きく半円形で曲げているが、長い方は基部を約四五度に折り曲げている（第 38 図 18・19）。

その大きさは、短いもので全長約一四糎、幅約三・五糎でわずかに内湾する長方形のものである。長いもので長さ約一九糎、幅は基部で約三糎、それから約一〇糎のところでは約三・五糎の大きさになって、先端近くでは約三・〇糎になっている。背部は弧状で先端は半月状の刃部に内湾するものである。

斧
有肩式斧である。柄を装着できる中空の袋部を鉄を曲げて前面で若干の隙間を作って合せている。全長約九糎。袋部約六糎、刃部幅約六糎である（第 38 図 20）。



第 38 図 2 号墳二次埋葬施設出土鉄器実測図

第七章 重立山三号墳

三号墳は、二号墳の東側にあり、その墳頂は平坦面で、四号墳の墳丘からみれば前方後円墳の前方部であつてもよいと考えられる立地であつた。調査の初期の段階では、その可能性も考慮に入れながら進めたのであつたが、調査の結果、前方後円墳ではないと判つた。

一 調査の経過

昭和四七年

八月 三日 三号墳の表土はぎを始める。

2区から須恵器甕の破片が出土した。取り上げにかかったため数が多く途中で作業を中断した。

昭和四八年

三月 四日 昨年の作業は一号墳に集中したため現場はそのままであつたが、今日から再開することにした。

まず、須恵器壺出土の地点を確認して、その破片を取り上げた。

三月 五日 表土削りを始めたが大雪のため作業は中止。

三月 七日 土師器片が3区の原点から西へ約一・一五米、北に約一・二米の地点から出土。また、この周辺部から埴輪片三片を検出した。また、この3区の墳頂部から北へ約三米に、石塊があつたがその下は黒褐色の腐植土であつたので、その下層の黄褐色土まで削り出すことにした。

三月二〇日 この三号墳の上層は相当流失し、外見からは古墳らしくない墳丘であったが、墳頂部を中心にして黄色土層のなかに黒色土の土壌らしいものが確認された。

三月三〇日 墳丘の断面図完成。

四月 二日 三号墳の墳丘実測終了。

四月 五日 埋葬施設確認のため表土から掘削を始める。

四月 六日 埋葬施設らしき内傾した赤褐色層が現われた。

四月 八日 1区の墳頂中心部周辺の掘り下げで粘土ブロックが出土し、付近を精査中に刀子一（長一三糎、幅二糎）を検出。

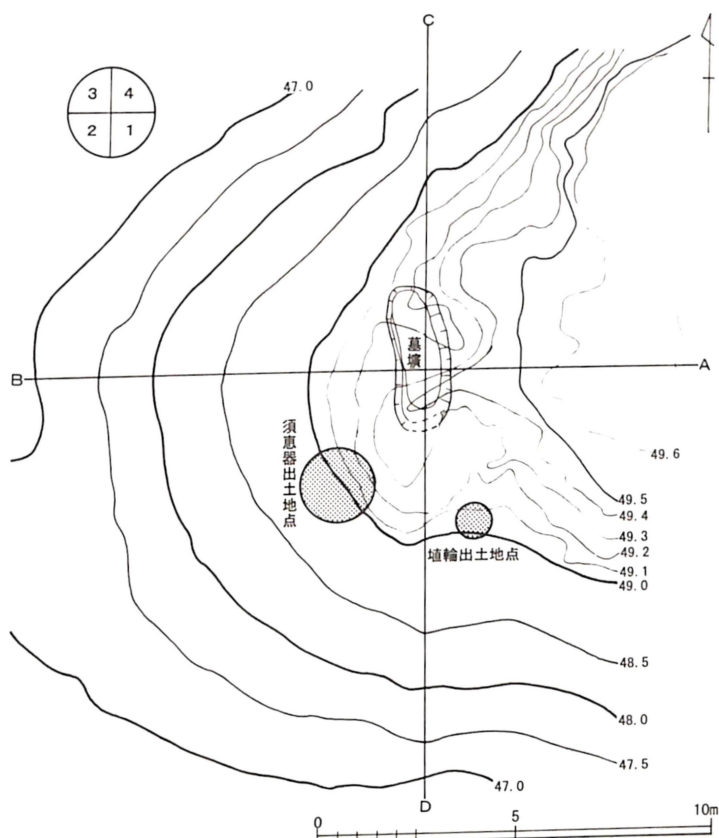
四月一六日 二号墳・三号墳ともにその間に溝があることが判明した。

四月二一日 墳頂中心部より東約一五〇糎のところから土師器片出土。

二 外部構造

墳丘の形態・規模・構造（第39・40図）

三号墳の外形調査を行った際に、当初は前方後円墳ではないかと考えた。それは二号墳と三号墳の境界が、二号墳築造に際して溝が掘られ、その範囲が劃されて明確であったが、その東側、墳丘の上にある三号墳の西側では、上段にあるけれども、墳丘の高まりがほとんどなく、平坦面がそのまま東側の四号墳に接するという地形であった。分布調査の段階では墳丘と考えられたかも知れないが、樹木伐採の後にみられる景観からいえば、独立墳と



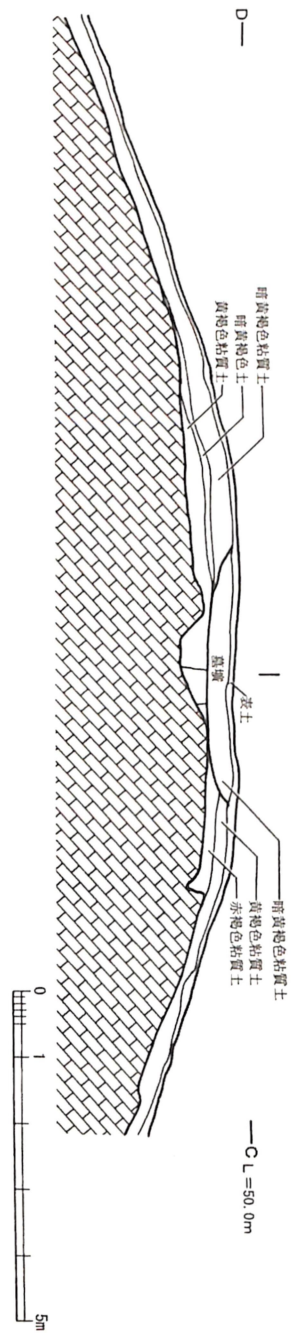
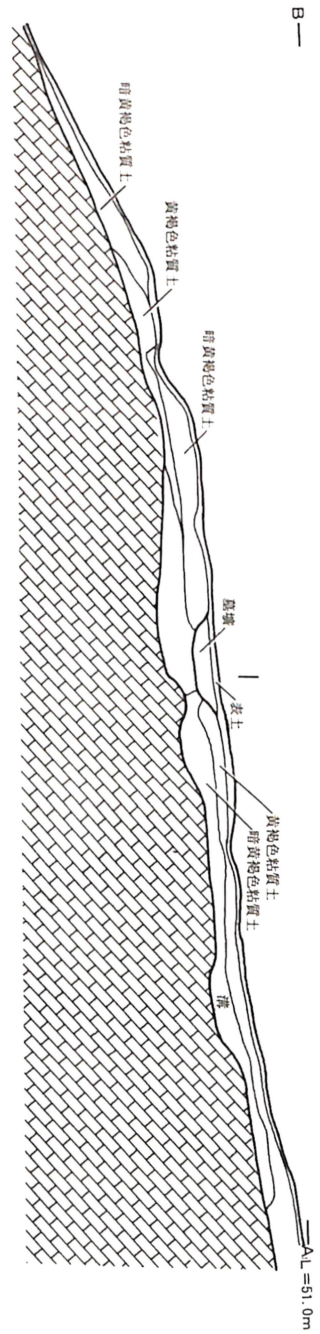
第39図 3号墳墳丘実測図

はみなすことが出来ない程であった。ところが調査の結果、東側から三号墳の溝と考えられるものが出土したので、墳丘は東西約一六・五米、南北約一七・五米、高さ約一米の規模であると判明した。

ただしこのような古墳の高さの規準をどこに取るかは問題である。それというのは東側の丘陵上からみれば、墳丘の高まりがないので墳頂部にあたる部分は、同じ高さか、それ以下であり、一方、西側の二号墳との境からみれば、高さが約二・五米から約三米になるのである。ここでは、東の溝

底から二号墳の東の溝とを結んだ線を基線として墳丘高を決めておくことにした。
墳丘は、西側の二号墳と接する位置まで地山を掘削して、墳頂部に盛土をしているのである。墳丘の断面図においても判るように、この三号墳が築造された場所の基盤となった地山そのものに、凹凸があったようで、それに対する整地のため盛土も必要であったと考えられる。

しかし、状況からいえば、古墳築造後、盛土が流出した可能性が大きい。



第40图 3号填坟丘断面图

三 内部構造

埋葬施設の形態・規模・構造（第41図）

三号墳の埋葬施設は、二号墳との境をこの墳丘の西端として考え、東を溝までの範囲と考えると、墓壙はその中心に営まれたのではなく墳丘の三分の二東側によったところに営まれている。これは、地形上やむを得ず、墳丘の頂部の位置が東側に片寄るからであろう。

墓壙 墓壙は表土層下に主軸の方向を南北にとり、掘られていた。その規模は、上縁で南北の長さ約三・七米、中央での幅約一・六米、底部での南北の長さ約三・一米、中央での幅約一・〇米、深さは約〇・四米である。形としては、南側では二段掘りになっているが浅い。なお底部が凹面になっている。

墓壙の規模と形態を明らかにすることはできたが、そこに埋葬された木棺については、その痕跡がなかったのを知ることはいできない。墓壙からは狭長な棺であったことが判る。さらに壙底は若干凹面になっているので割竹型木棺が利用されたと考えられるのである。そうすると、墓壙の深さが約〇・四米では浅すぎるので墳頂部がもう少し、高かったと考えるべきだろう。

遺物出土状況（第41図）

墓壙内の中央の南寄りから副葬品として刀子一本が出土した。

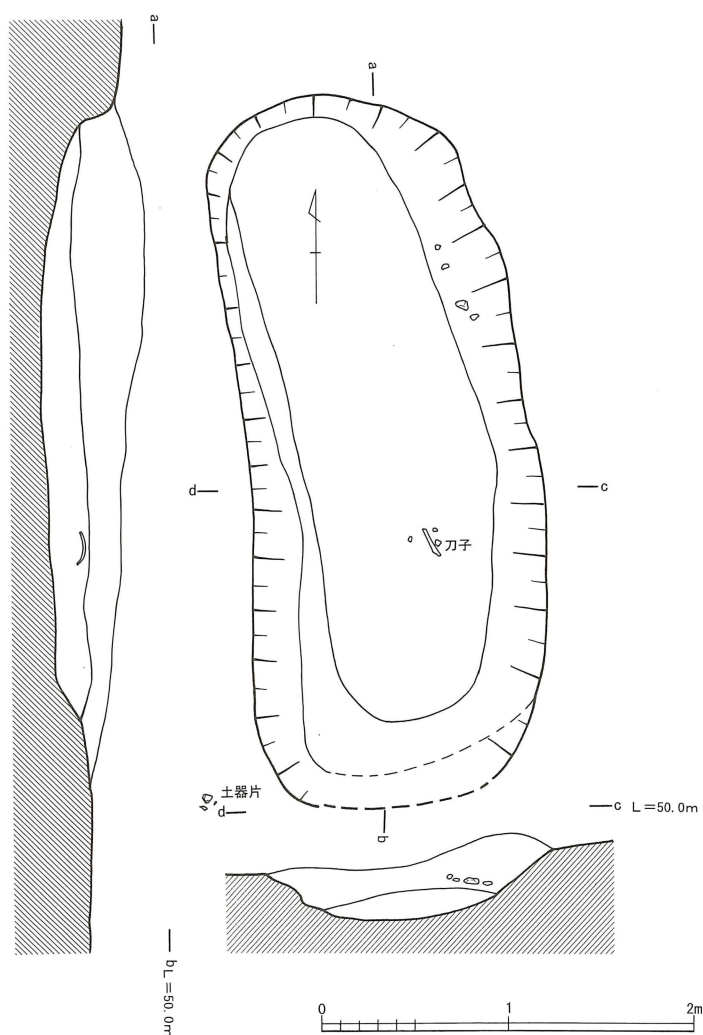
墳丘上1区の南側から円筒埴輪片が出土した。この地点は四号墳から離れ、二号墳からは地形的に上段に位置しているので、人為的な作用が加わらない限り、自然に流入することはあり得ないのである。

ここでは、墳丘自体流失したことが特に考えられるが、この丘陵上広範囲にわたって削っているのです、この上

にも、一号墳のように多くの円筒埴輪が使用されていたとすれば、丘陵のどこかに流れ込んでいる筈であるが、そのような痕跡もなかった。

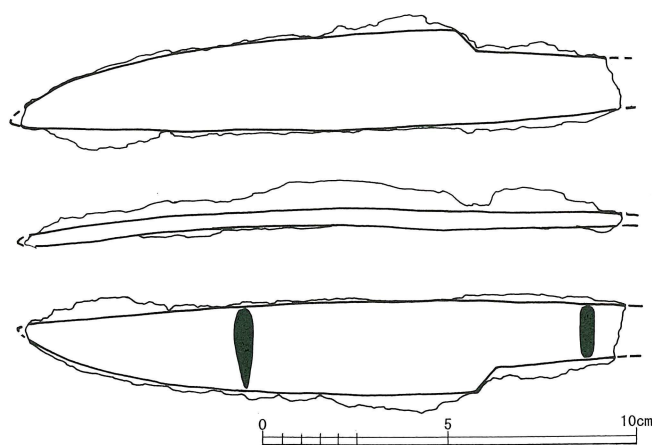
このことから、この埴輪片は、この三号墳で、数個使用されたとみるべきだろうと考えるのである。これは、土砂の流失が著しくなかった二号墳の場合と同様であると考えても差し支えないと思われる。

また、埴輪の南西部にあたる2区から、埴頂から約三米降ったところを中心に、須恵器の甕を復原すると一個体だけであり、他の器種は含まれなかった。



第41図 3号墳埋葬施設副葬品配置図

これは埴輪と同様に埴丘上に置かれたものであるか、または二次埋葬ということで棺として使用されたものであるのか、にわかに断定は出来ないが、どちらとも解釈できるものである。二次埋葬用の甕であるとするならば、もつと深い所に埋められていて、そのままの姿で出土するだろう。し



第42図 3号墳埋葬施設出土刀子実測図

かし、この出土状態からみれば、須恵器甕が、例え埋められたものであったとしても何時かの時期に露出したとしか考えられないのである。また、土師器片が採集された。

出土遺物各説

鉄製品

刀子

刀子は茎部の端が欠失しているが、推定長は約九糎で刃部の長さは約六糎、幅約一・二糎、厚みは約三糎、茎部の幅は約八糎である。関は刃部から茎にむかつて斜めに切れ込んでいる（第42図）。

円筒埴輪

二六片。円筒埴輪片は、焼成が堅緻である。

土器類

土師器片 三三片の土師器片が出土した。

須恵器甕

出土したときは、一部を除いて大半は細片になって全体を正確に復原するには胴部の破片が若干足らなかった。器高も推定せざるを得なかった。推定高約五〇糎、胴径約四五糎、口径約二四糎、やや大型に属するものである。蓋の口縁部は大きく外反するもので口縁端から少しさがったところに一本の突起帯がある。その断面は丸みをもち、鋭さはない。胴部の部分は欠失しているが、器体表面全体に細かい叩き目が施され、底は丸底である。特に土器安定をはかるためか底部は径約一一糎で凹んでいる。

第八章 重立山四号墳

重立山古墳群のうちで最東端に位置するもので、三号墳の東側にある。地形的には、明確な墳丘の高まりがあり、三号墳とは対照的な外観である。

一 調査の経過

昭和四七年

八月 三日

四号墳の表土はぎを始める。

2区から円筒埴輪片が出土した。

三月 四日

晴。墳頂部を中心にして半径約三米の円周上に円筒埴輪のめぐるのを検出した。さらに半径約五米の外周部に円筒埴輪片が散在していたが、これは、上の埴輪の破片が流下したものであると判断した。三号墳と四号墳の墳丘の流れをみると、この両墳があたかも前方後円墳の形態をとるようにも見えるのでその点よく留意して確認しなければならないと考えた。

三月 五日

曇のち大雪。表土剥ぎを行うが、一〇時半頃から大雪。作業続行不可能。

三月 九日

1区では、墳頂部より約二・五×二・七米の円周上表土下約一〇糎のところ八個の埴輪が約四〇糎間隔で並んでいることが確認できた。特に1区において残りはよかつたが、4区では1区の延長線上と考えられる地点で、深さ約二〇糎掘り下げたが、原位置と考えられる埴輪はな

く、わずかに流れた埴輪片があつたにとどまつた。

三月一〇日 墳丘の表土剥ぎを行う。1区・4区の裾部と五号墳との間は深く落ちこんでいることが判明した。また一方、三号墳と四号墳との境において四号墳から流下した埴輪片を含む土がかなり厚く堆積している状態であつた。

三月一日 晴。1区・4区の裾部はかなり深く带状に溝となつていることが判明。きれいな円墳を示す曲線が浮び上つた。

三月二日 晴。1区の円筒埴輪列の撮影と実測。

三月五日 晴。墳丘の実測と平行して2区・3区の墳丘裾部地山面を追う。

三月六日 晴。3区の墳丘裾部の堆積土層のなから多数の埴輪片が出土する。

三月一七日 円筒埴輪の実測。

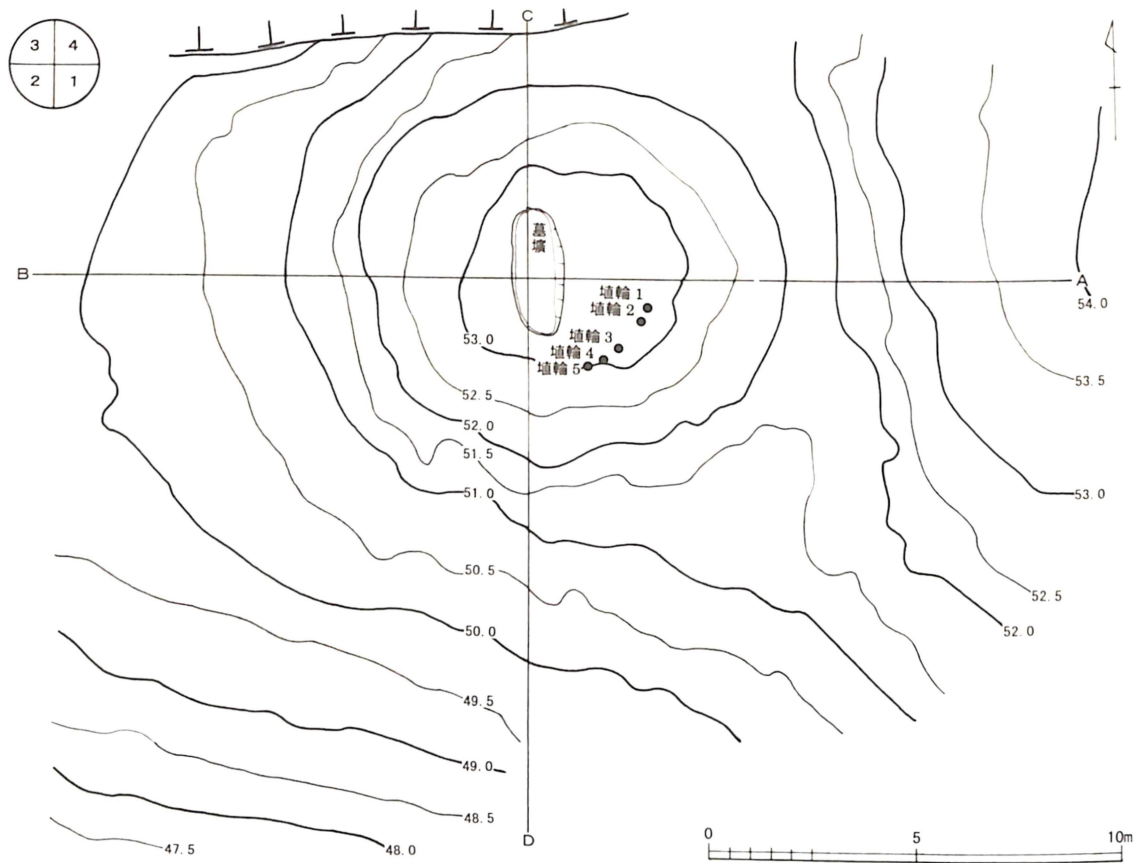
四月一日 1区の円筒埴輪列（五個）が盗難にかかる。

四月二日 2区、4区で墳頂部から約五〇糎の土を削除した。

四月五日 4区を掘り下げると、南壁に赤褐色土層が墳頂の中心点より約二・五米のところから内傾していることが判明。墓壙が墳丘上より掘り込まれていることが判つた。

二 外部構造

墳丘の形態・規模・構造（第43・44図）



第 43 図 4 号墳墳丘実測図

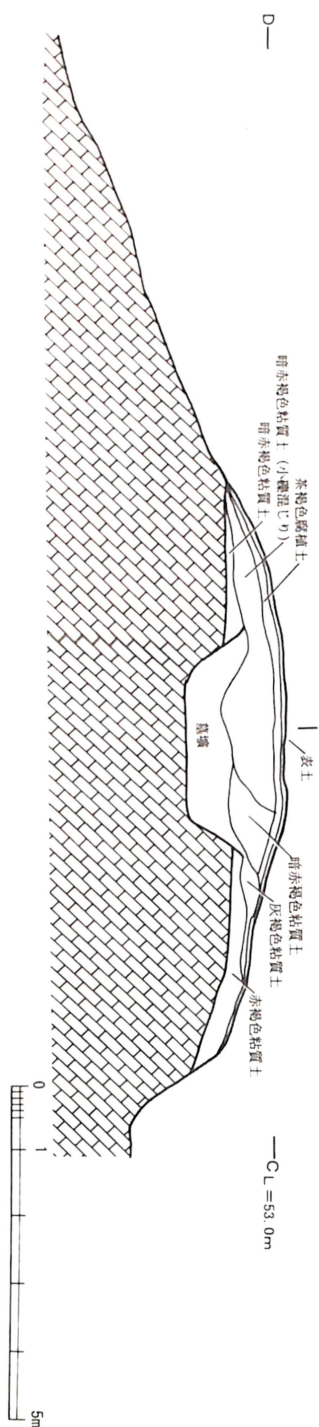
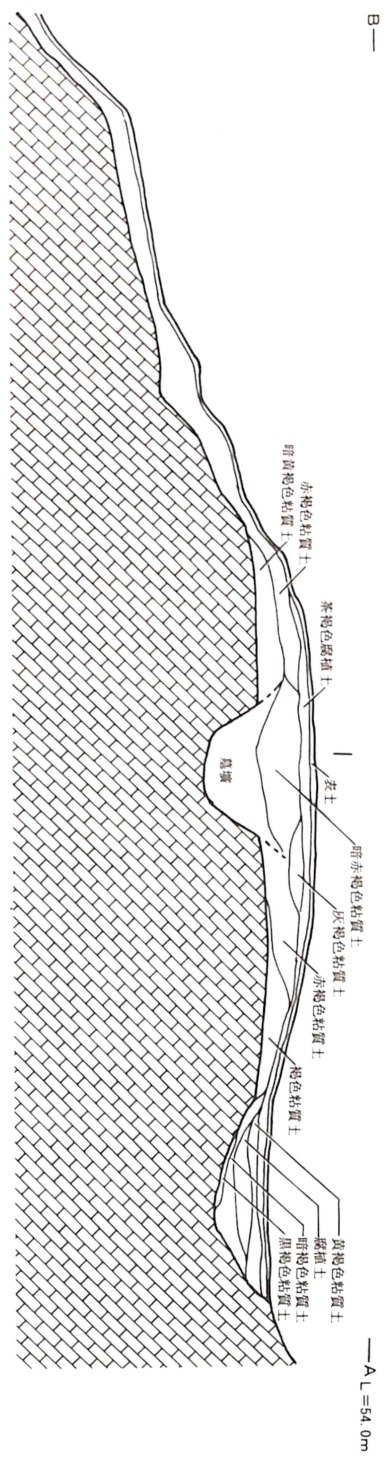
重立山古墳群の前山の場合でも、墳丘の規模を決めるのに、墳丘の東端部は溝等によって画かれて極めて明確であるのに、その西側はどこまでという測点のとりかたに問題が残る。

この四号墳はそれらに較べて墳丘が高いので、墳頂部の位置を考慮に入れると決定しやすい。墳丘は、東西約一五米、南北約一五米の円形である。

円筒埴輪出土状態（第45図）

墳丘頂部の平坦面の表土を除去した段階で円筒埴輪が出土し、特に墳丘の南東すなわち1区において円筒埴輪が八本、約四〇厘間隔で直径約六米の円に乗るようにして出土した。

しかし、これらの埴輪は、出土したときには、そのすべてが割れていたが、なお、底部は古墳築造当時の原位置をよく保つ

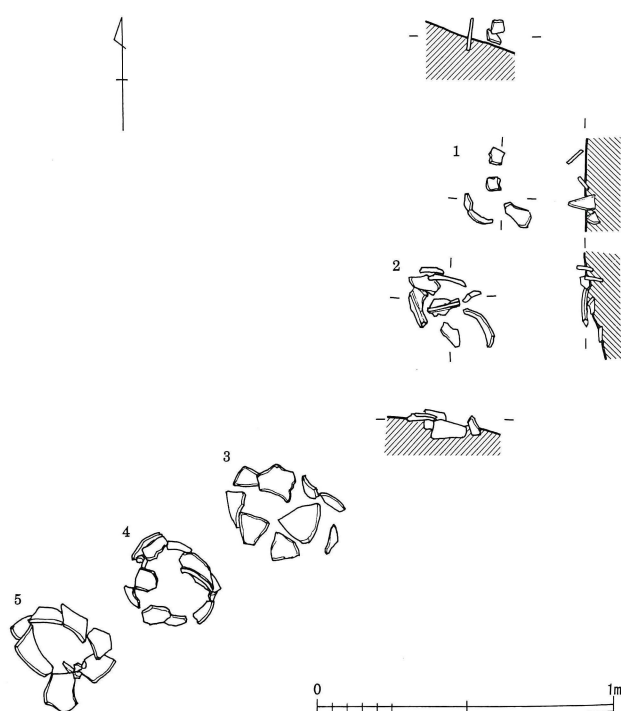


第 44 図 4 号墳墳丘断面図

の掘られたことが判ったのである。

墓壙 墓壙の規模は墳丘のほぼ中央部において、上縁の長さ三・一米、幅約一・二米の長方形で、底部では長さ約二・九米、幅約〇・九米、深さ約〇・三米である。この墓壙の底部において、南北両端部は丸くなっている。

この墓壙の底部に、木棺の形跡はとどめていなかった。底部の長さと幅との比率が約三対一であるが、この墓壙に納められたと考えられる木棺の跡はまったくなく木棺それ自体を知ることが出来なかった。しかし、底部の長さは約二・九米、幅約〇・九米、すなわち、三対一の比率という細長いものであるので恐らく割竹型木棺であ



第 45 図 4 号墳墳輪出土状況図

ていた。その点、一号墳のそれに決してひけを取らないものであった。ところが残念なことに、近所の一少年によって全墳輪を盗まれたことであつた。再び戻ったとき原位置にもどし確定することは非常に困難なことであつた。

三 内部構造

埋葬施設の形態・規模・構造（第46図）

古墳の発掘に際し、墳丘上から削っていくと、墳頂部表土層の直下から墓壙の縁辺部が土堤と地面とに現われた。このことから、当墳は墳頂部から墓壙